

---

# 僕と幼なじみな新任教師？

まあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と幼なじみな新任教師？

### 【Nコード】

N8230X

### 【作者名】

まあ

### 【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作小説です。文月学園に1人の教師が赴任しました。新任教師『久島蓮夜』は常識から逸脱している生徒達がそろそろ文月学園でどんな生活をするのでしょうか？

## 第1問（前書き）

毎度、おなじみのまあです。

『思いつき』の昇格です。まだやるのかよ。他もあるのにいい加減にしるよと言っ声も聞こえますが気にしない方向でお願いします。

思いつきで書いた時と設定が変わってきます事をご了承ください。

## 第1問

「久島蓮夜ね。高校は進学校、大学時代に海外留学経験あり?……」

久島蓮夜は文月学園の教師に空きが出たと知り、採用試験の内容を電話で問い合わせたのだがその日に学園に来るようと言われ、現在は文月学園の学園長室で『藤堂カヲル』学園長の前に立たせられている。

(……何か居づらい)

蓮夜は広い学園長室に2人つきりであり、居心地が悪そうにしていると、

「あなた、大学で留学までしておいてどうして教師になろうとなんて思ったんだい? この成績ならあっちで就職先なんていくらでもあっただろ」

「それは、高校時代に恩師とも言える先生に出会えたからです。そんな先生のようにになりたいと思いました」

「……今の時代、そんなの流行らないさね」

「そつかも知れません」

学園長は蓮夜の学歴でこの学園の教師を希望する理由がわからないようで首を傾げると蓮夜は少しだけ照れくさそうに笑い、学園長は蓮夜の言葉にため息を吐くが蓮夜の答えが気に入ったようであり、

「採用さね。今日から働いて貰うよ。廊下で待つてな。誰かに案内させるから」

「採用？ 今日から？ へ？」

「何だい？ 何か問題あるのかい？」

「い、いえ、すみません。いきなりすぎて頭が処理できていませんでした。あ、ありがとうございました」

学園長は蓮夜を採用すると笑うと蓮夜は採用試験を受けたその日に同格通知が貰えるとは思っていなかったようで間の抜けた表情になると学園長は楽しそうに笑い、蓮夜は1度、深呼吸をして自分を落ち着かせると学園長に向かって深々と頭を下げ、

「そつだ。久島先生、あなたには2年Fクラスの副担任と授業全般を受け持つてもらうからね」

「え？ 担当教科は英語でと言う話でしたが」

「あんたの能力ならできるだろ。それにうちのFクラスは特殊だね。西村先生だけだと人手が足りないんだよ。それがあつての採用試験だしね」

「そつですか。わかりました。それでは失礼します」

学園長は蓮夜にかなりの無茶な条件を言い渡すが蓮夜はあまり気にした様子もなく頭を下げると学園長室を出て行き、

「……まさか、こんなに有能な人材が転がってるとはね。良い拾い

ものだったね。能力が履歴書通りだったら、正規も考えてみようかね」

学園長は蓮夜の背中を見送ると蓮夜の第1印象で有能だと判断したようでくすりと笑うと、

「……高橋先生、あたしだよ。さっき、採用試験を受けたのを採用したから、誰か案内を頼むよ。名前は久島蓮夜だよ。履歴書を見る限りと印象では有能みたいだからね。正規雇用も考えているからしっかりと頼むよ」

「久島蓮夜ですか？」

職員室に内線をかけ、『高橋洋子』教諭に蓮夜の案内を頼むと電話の先の洋子は蓮夜の名前に何かあるのか首を傾げる。

「ん？ 知りあいかい？ ああ、そう言えば同じ大学だったね」

「そうですか。あの、久島くんがですか。わかりました」

学園長は洋子の出身大学が蓮夜と同じだと思いだしたようで学園長からでた言葉に洋子は蓮夜が自分の知っている人間と同一人物だと理解したようであり、

「案内の件、わかりました」

「ん。それじゃあ、頼むよ」

学園長は洋子に蓮夜を任せると内線を切る。

## 第2問

「……学園祭の準備期間なのに野球か」

「懐かしいですか？ 久島くん」

蓮夜は廊下の窓から野球をしている生徒達を見て苦笑いを浮かべると彼の背後から一見さえない地味な男性が声をかける。

「ふ、福原先生！？ お久しぶりです」

「はい。久しぶりですね。久島くん……いえ、久島先生と呼ばないといけないでしょうか？」

蓮夜は振り返るとその男性は蓮夜が教師を志すきっかけになった恩師である『福原慎』教諭であり、慌てて頭を下げると福原教諭はかつての教え子が成長した姿を見る事が出来た事が嬉しいようで柔和な笑みを浮かべ、

「えーと、福原先生に先生と呼ばれるとなんか気恥ずかしいですし、それに俺は臨時職員ですし、長居もできるかはわからないですからなれている方が良いでしょう」

「ダメですよ。久島先生、生徒の目もありますから、学生気分では困ります」

「は、はい！？ って、洋子先輩？ きよ、教師になっていたんですか！？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて『くん』付けで良いと答えようとするがそんな彼の考えを否定する女性の声が背後から聞こえ、慌てて振り返るとそこには大学時代の先輩である洋子が立っており、蓮夜の態度では生徒に示しが付かないと言いたげである。

「はい。久島先生の受け持つ2学年の学年主任をやらせていただいています。Fクラスはいろいろ大変だと思いますがお互いに協力して行きましょう」

「学年主任？ 本当ですか？ その若さで」

「文月学園は生徒に限らず実戦主義ですから、能力のある人が上のポストにつけるんですよ。久島先生も頑張って臨時職員ではなく、正規職員になれるように頑張ってください。学園長先生も期待しているようでしたよ」

「は、はい。尊敬する福原先生や洋子先輩と同じ学校で教鞭を振るって行けるなら、どんな事でも努力します」

洋子は慌てる蓮夜の様子にくすりと笑うと蓮夜は他の学校ではありえないであろう人事に顔を引きつらせるが福原教諭は蓮夜にも努力をすれば正規の職員にもなれると蓮夜を応援すると蓮夜は大きく頷き、

「久島先生、昔、言っていた尊敬する先生と言うのは福原先生なんですか？」

「はい。福原先生です」

「そうですか」



洋子は蓮夜の様子に以前、彼が話してくれた恩師の事を思い出したように蓮夜が大学時代と変わっていない事に昔を少しだけ懐かしんでいるのか柔らかい笑みを浮かべると、

「久島先生、学園の案内は私と福原先生で受け持ちます」

「よろしく願います」

「はい。それとですね。生徒の目もありますから『先輩』は止めるように」

「わ、わかりました。高橋先生」

洋子は蓮夜が昔と変わらない事に安心したようでくすくすと笑うと蓮夜は慌てて頭を下げ、

「それでは行きましようか？ 案内が終わったら西村先生にFクラスを紹介していただかないといけないですね」

「はい。よろしくお願いします……あの、学園長先生も高橋先生もFクラスは大変だと言ってましたけど、何かあるんですか？」

「……久島先生、それはおいおい話をしましょう」

「高橋先生、視線を逸らされると不安しか感じないんですけど!？」

福原教諭は蓮夜の案内を済ませようと歩き始めると蓮夜は自分が受け持つ2年Fクラスの話の聞こえとするとするが洋子は蓮夜から視線を逸らす。

### 第3問

「それでは、久島先生、行きましょうか？」

「はい。西村先生、よろしく願います」

学園設備の案内が終わるとFクラスの担任の『西村宗一』教諭に引き継ぎをされてこれから授業を受け持つことになるFクラスへと向かうことになる。

「久島先生は臨時職員を続けていたと聞きましたが、どうして正規の職員にならないんですか？」

「なかなか、タイミングが合わなくて後は私以上に有能な先生はたくさんいますから……西村先生、さっきも見てはきたんですけど、旧校舎の方は酷いですね」

蓮夜は西村教諭と少し話をしながらFクラスの教室に向かうのだがFクラスの教室のある旧校舎に足を踏み入れると新校舎との違いに苦笑いを浮かべると、

「まあ、文月学園<sup>ウチ</sup>のカリキュラムでは仕方のない事なんだが」

「実戦主義ですか。それでも、ここまで酷くなると逆にやる気が失せませんか？」

「……久島先生、文月学園<sup>ウチ</sup>の生徒はそんな人間ではないですよ」

「そうなんですか？ それをバネにできる生徒が多いなんて教えが

いがありそうですね」

「……いや、そっちの意味ではないんだ。そうであればどれだけ良  
いか」

西村教諭は召喚システムと言う特殊なカリキュラムの影響だと苦笑  
いを浮かべると蓮夜はこんな環境下でも勉強に取り組む事ができる  
勤勉な生徒がそろっているのだと考えるが西村教諭は眉間にしわを  
寄せる。

「そっちの意味ではない？ って事はどう言う事ですか？」

「まあ、見ればわかる。少し待っていてくれないか？」

「はい。わかりました」

蓮夜が首を傾げた時、Fクラスの教室の前に到着したようで西村教  
諭は教室の中から聞こえる騒ぎ声に大きくため息を吐き、

「みんな、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補はこの3つです」

教室のドアを開けると生徒達は清涼祭の話し合いをしているようで  
少し間の抜けたような男子生徒とポニーテールの女子生徒を中心に  
話し合いをしているようで女子生徒は西村教諭に話し合いで出た清  
涼祭の出し物の候補の3つを見せる。

「……補習の時間を倍にした方が良いかも知れんな」

（あれ？ …… ひよつとして、明久か？）

西村教諭は黒板に書かれている3つの候補を見て大きく肩を落とすとFクラスの生徒は西村教諭がため息を吐いた理由を『吉井』と言う男子生徒に責任を押し付け始め、蓮夜はその男子生徒に視線を向けると彼の顔に心当たりがあるようで首を傾げた時、

「馬鹿者！！ みつともない言い訳をするな！！ 先生はバカな吉井を選んだこと自体がバカな行動だと言っているんだ！！」

「あ、あの。西村先生、それは言い過ぎじゃないでしょうか？」

西村教諭は生徒達が責任を1人の生徒に押し付けた事を叱りつけるがその言葉はどこかおかしく蓮夜は教室に入ると苦笑いを浮かべて西村教諭を止め、

「あ、あれ？ レン兄？」

「アキ、この人と知り合い？ って言うか、誰？」

男子生徒は蓮夜の顔を見て驚きの表情をすると女子生徒は男子生徒の制服を引っ張り、男子生徒に蓮夜の事を聞く。

## 第4問

「やっぱり、明久か。大きくなったな」

「ん？ 久島先生は吉井と知り合いですか？」

「レン兄、先生ってどう言う事！？ って、頭を撫でないで！？ 僕はもう小学生じゃないんだから！？」

蓮夜は男子生徒の反応に彼が幼なじみの『吉井明久』だと確信したようでくすりと笑うと彼の頭を撫で、その様子を見て西村教諭は首を傾げる。

「ん？ 悪いな。どうしても昔の印象ってのは変わらなくてな。西村先生、明久は俺の幼なじみなんです。明久の両親は共働きですし、よく家にも遊びに来ていましたので」

「そうなんですか？」

「あのね。印象は変わらないって言うても、レン兄が大学に進学してからなんだから、7年も経つんだよ。僕は高校生なんだから」

蓮夜は苦笑いを浮かべると自分と明久が幼なじみだと話し、明久は変わらない年上の幼なじみの様子に安心しながらも流石に小学生扱いされている事に大きく肩を落とすと、

「あ、あの。西村先生、そちらの久島先生と言うのは？」

「あれ？ 明久、あの子って、お前の小学校時代の友達だよな？」

「う、うん。そうだけど」

1人の女子生徒が西村教諭に蓮夜の事を聞き、蓮夜はその女子生徒に何か心当たりがあったようで明久に女子生徒の事を聞き、明久は頷く。

「そうだよな。名前は確か……瑞希ちゃん、姫路瑞希ちゃんだ。明久の……」

「レン兄、いきなり何を言っただよ!? 姫路さんに失礼だろ」

蓮夜は昔の記憶を引っ張り出すと明久は蓮夜の口を塞ぎ、

「なるほど、そう言う事か?」

「そ、そう言う事って、どう言う事だよ!?」

「まあ、気にするな。兄としては弟がしっかりと成長している姿を嬉しく思っているだけだ」

「……久島先生が吉井と知り合いなのはわかりましたが、一先ずは生徒達に紹介させて貰います」

蓮夜は明久の様子に1つの答えを導き出したようでくすりと笑うと西村教諭は蓮夜を一先ず、生徒達に紹介しようと思ったようで蓮夜と明久の間に割って入ると、

「今日から俺以外にFクラス専属の教師を置く事になった。それがこの先生だ。久島先生」

「はい。久島蓮夜です。今日から皆さんと一緒にこの学園でお世話になる事になりました。今は臨時職員としての採用ですのでいつまで君達を受け持てるかはわかりませんがよろしくお願いします」

西村教諭は蓮夜を生徒達に紹介し、蓮夜は自己紹介をすると生徒達に向かって深々と頭を下げる。

「久島先生、俺は生徒指導の方もあるので、クラスをお願いします。このバカどもは目を放すと野球をしたり遊び始めますので」

「あ、さっき、野球をしていたのはこのクラスですか」

西村教諭は蓮夜に生徒達を任せると言うのと蓮夜は苦笑いを浮かべて頷き、

「ん。そうだった。お前達、クラスの設備の事なんだが、清涼祭の稼ぎを設備向上に使っても良いと学園長先生から話があった。だから、少しは真面目に取り組むように、それでは久島先生、よろしくお願いします」

「はい。わかりました」

西村教諭は学園長から清涼祭の売上を酷い設備の向上に使っても良いと許可をもらった事を生徒達に伝えると教室はざわざわと騒ぎはじめ、西村教諭は真面目にやる気になった生徒達の様子を見て一瞬だけ表情を緩ませるが直ぐに表情を引き締めると蓮夜に生徒達を任せて教室を出て行く。

## 第5問

「それじゃあ、俺は見てるから、話し合いの続きを」

「久島先生、まとめてくれるんじゃないんですか？」

「えーとですね」

蓮夜は窓ぎわに置いて教師用のパイプ椅子に腰をかけようとすると明久と一緒に話し合いをまとめていた女子生徒が蓮夜に助けて欲しいのか声をかける。

「島田、島田美波です」

「島田さんだね。すいません。今日、面接を受けていきなりだったから生徒の名前も全然だね」

女子生徒は蓮夜が自分の名前を知らない事に首を傾げた後『島田美波』と名乗ると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「学園祭は生徒のものだからね。教師である俺が口を出すより、みんなで話し合って決めた方が思い出に残ると思っただけ。暴走しすぎると少し方向を正せて貰うけど、今はちょっと早いかな」

「そうなんですか？」

「ああ。それにこの3つの名前は明久が考えただろうから、仕方ないとしても3つとも面白いと思うよ」



蓮夜はまだ教師である自分が口を出す事ではないと笑うが、

「ちょっと、レン兄、僕だから仕方ないってどう言う事!？」

「……なるほど、幼なじみの久島先生がこう言うつて事は明久は昔からバカだったと言うことか？」

「雄二!! どう言う事だ!!」

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが1人の大柄の男子生徒のつぶやきに相手を変えたようで男子生徒を怒鳴りつける。

「あ? そのままに決ってるだろ。バカ久」

「上等だ。表出る。バカ雄二!!」

明久と『雄二』と呼ばれた男子生徒はにらみ合いを始め出そうとするが、

「ケンカはしない」

「「あだ!？」」

蓮夜は持っていたメモ帳で2人の頭を軽く叩くと、

「レ、レン兄、何するんだよ」

「明久、お前は島田さんと一緒に意見をまとめないといけないんだろ。後は」

「……『坂本雄二』」

蓮夜は2人の様子にため息を吐くと男子生徒はあまり清涼祭の興味無いのか明久とのにらみ合いを邪魔された事につまらなさそうな表情をして名前を名乗る。

「坂本雄二？ ……えーと、確か、クラス代表だね」

「ああ」

蓮夜は西村教諭から説明を受けているのか雄二がこのクラスの代表である事を確認すると雄二は小さく頷き、

「そう。とりあえずは落ち着く。今はクラスのみんなに迷惑がかかるから止めなさい」

「……止めるのは今だけなのかよ」

「学生時代の友人とはケンカも必要だからな。いじめや行きすぎたものじゃない限り、そこまで強くは言わないよ」

蓮夜は明久と雄二に一先ず、ケンカを止めると雄二は蓮夜がケンカ自体は悪い事と思っていないうで眉間にしわを寄せるが蓮夜は気にする事もなく、

「そ、それは放任過ぎないでしょうか？」

「そうでもないと思うよ。ケンカくらいしないと痛さってわからないだろ。それを知らずに人をナイフで刺しましたとかよりは殴り合いでケンカをした方が清々しい」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜はケンカはした方が良  
いと言い切り、

「……おい。明久、久島先生って体育会系か？」

「……うん。高校2年の時にケガで引退するまで勉強なんかしない  
で本気でマンガで無敵の流派を倒すって言ってた。小学校時代から  
空手で全国常連」

「……」

雄二は蓮夜の言葉に明久に耳打ちをして蓮夜の過去を聞くと明久か  
ら聞かされた事実に関心をもち、顔を引きつらせる。

## 第6問

「それじゃあ、明久、島田さん、続きを頼むよ」

「はい。アキ、あんたも遊んでないで手伝いなさいよ」

「う、うん」

蓮夜は進行を明久と美波に任せると売上でクラス設備をあげる事もできると言う話に盛り上がり始め、

(……暴走しているな)

その暴走は蓮夜が教室に来る前に決まりかけていた3つの出し物以外にもあがって行き、蓮夜はその様子に苦笑いを浮かべると、

「レン兄？」

「静かにしなさい。何のために話し合いをしていたんですか」

蓮夜は立ち上がり生徒達に落ち着くように言うが静まる事はなく、蓮夜は明久と美波を少し遠ざけ、

「……お前ら、人の話を聞く気はないのか？」

教卓を蹴り飛ばすと教卓は粉々に吹き飛んでしまい、その様子に生徒達は何があつたかわからないようで息を飲むと、

「良いか。島田さんと明久は君達を選んだ実行委員なんだよな。そ

れなのにその2人を無視して騒ぐなんてどう言っつもりだよ？」

「「「……………」」」

蓮夜は落ち着いた様子で生徒達に聞くが蓮夜の背後には何か黒いものが見え隠れしており、その様子に生徒達は驚いているのも重なっているせいか蓮夜の問いに誰も答える事はない。

「坂本代表！！」

「な、なんですか！？」

蓮夜は生徒達の様子に雄二を呼ぶと雄二は自分が呼ばれるとは全く思っていなかったようで声を裏返すと、

「……………変わりの教卓を取ってきますので、島田さんと明久と一緒にみなさんの話をまとめておいて下さい」

「お、おう」

蓮夜は苦笑いを浮かべて教室を開けている間の事を雄二に頼み、雄二は代表としての責務も果たしていない事に怒られると思ったように蓮夜の口から出た言葉に慌てて返事をし、

「それじゃあ、島田さんも明久もよろしく」

「は、はい！？」

「……………レン兄、やりすぎだよ」

蓮夜は教室を出て行くと明久と美波は顔を引きつらせて蓮夜の背中を見送る。

「く、久島先生は怒らせると怖いのかな」

「……………意外」

蓮夜が教室のドアを閉めると同時に教室の中に漂っていたおかしな緊張感は一気に緩み、一見少女とも間違えそうな少年『木下秀吉』と手に持ったデジカメを整備している小柄な少年『土屋康太』の2人が顔を引きつらせながら蓮夜の幼なじみでもある明久に視線を送るとクラスメート達も同じ事を思っているようで視線は明久に集中し、

「な、何？」

「明久、お前が知っている久島先生の情報を話せ」

明久は集まる視線に声を裏返すと雄二は明久の肩に手を置いて明久が知りうる蓮夜の情報を全て話すように言うが、

「な、何を言ってるんだよ。そう言うのはレン兄に直接聞くのが普通だろ。ぼ、僕の口からなんてひ、卑怯じゃないか!!」

「そうか。白状する気はないか？　と言うか、その反応を見ると面白い事が聞けそうだな」

「アキ、何を隠してるの？」

「………… 吉井くん、私にもわかるように教えていただけませんか？」

明久は蓮夜の事を話すと自分に都合の悪い事もあるせいか、後ずさりを開始するが瑞希と美波の背後にはなぜか真っ黒な気配が漂い始め、その様子を見て雄二は楽しそうに笑っている。

## 第7問

「で、何で、久島先生の話をするのをイヤがるんだ？」

「待て！？ 雄二、この状態はおかしいから！？ まずは僕の足の上に乗せられているこの石を避けるんだ！？」

明久は対抗虚しくクラスメートに捕まるとどこから持ち出して来たかわからない石畳の上に正座をさせられるだけではなく、彼の足の上には石が積まれている。

「アキ、別におかしな事を聞いているわけじゃないでしょ。話さないよ」

「美波、おかしいのは話じゃないから、今、僕に起きているこの状況だから！？」

「なら、白状するか？ それなら、石は避けてやる」

美波は明久が蓮夜の事を話す事を嫌がっている意味がわからないとため息を吐くが明久にとっては問題はそこではないと叫び、雄二は蓮夜の情報を話すなら助けてやると笑い、雄二の意見に同調するようにクラスメート達は大きく頷く。

「……イヤだ」

「ムッツリーニ、追加だ」

「……………了解」



明久は意地でも言いたくないのか視線を逸らすと明久の足の上にはもう1枚石が積み上げられ、明久の悲鳴が教室に響くと、

「吉井くん、そんなに久島先生の事を話したくないなんて、2人だけの秘密だなんて、不潔です！！ 酷いです！！」

「ひ、姫路さん、何を言ってるの？ 僕とレン兄でそんな事あるわけが！？」

「……なら、どうして教えてくれないのか、ウチ達に教えてくれないかな？」

瑞希は何かおかしな方向で蓮夜と明久の関係を考えており、明久が全力で否定しようとした時、美波の手により、明久の足の上の石は3枚になっている。

「……明久、幼なじみと言うのはワシらも知っておるのじゃ、簡単なプロフィール喰らいでも良いのではないか？ 年齢とか」

「イヤだよ。そんな事を言っても、みんな、根ほり葉ほり聞く気だろー！！ ……せっかく、レン兄が前みたく笑ってくれてるのに」

秀吉は明久が意地にならない程度の内容で良いと落とし所を提案するが明久はクラスメート達を信用できないようであり、声を張り上げた後、少しだけ悲しそうに目を伏せると、

「……高校2年の時のケガか？」

「な、何を言ってるんだよ。ぼ、僕はそんな事は何も知らないよ」

「……明久、お前、わかりやす過ぎだ」

雄二は少し前に明久から聞いた蓮夜のケガの事をつぶやくと明久はその言葉に慌てはじめ、雄二は大きく肩を落とし、

「それに関しては俺も聞く気はねえよ。流石にお前の様子を見れば深入りしちやいけない気がするしな。俺はお前を地獄の底に叩き落としたいが、今のところは久島先生には何の恨みもねえしな」

「何だと、それはどう言う事だ!!」

雄二は蓮夜のケガの話には触れないと明久の耳元でつぶやくが明久は雄二の言葉に文句があるようで雄二を怒鳴りつける。

「そのままだ。それより、早くしないと久島先生が帰ってくるぞ。久島先生がこれを見ると……この石も拳で割れるか？」

「さ、流石にそれはないと思うのじゃ」

「………あの様子じゃ否定できない」

雄二は先ほどの蓮夜の様子を思い出して、今の行動が自分達の首を絞めている事だと気づいたようで顔の血の気が引いて行き、クラスメート達も雄二と同じ答えに行きついたようで顔を引きつらせると

「誰か、久島先生の足止めに走れ!! このままじゃ、明久の足の上に乗っている石のように割られる!! 全力で証拠を消せ。島田、時間がない。3つから、多数決で決めるぞ」

「わ、わかったわ」

雄二は慌ててクラスメートに指示を出し、蓮夜が戻ってくる前に証拠を隠滅するために動き出す。

## 第8問

「……で、お前達は何がやりたかったんだ？」

「……誰だよ。姫路を足止めに行かせたのは」

蓮夜は教室に戻ってくると明久への尋問をしていると言う事実を知っているようで眉間にしわを寄せると雄二は蓮夜の足止めに向かったのが瑞希だったため、簡単にはれてしまったようで大きく肩を落とす。

「す、すいません。吉井さんと久島先生がとっても仲が良さそうでしたので気になってしまいました」

「すまぬのじゃ。先ほどの久島先生の自己紹介では明久と久島先生が幼なじみと言う事しかわからなかったのじゃ、それで……」

蓮夜がご立腹の様子に瑞希と秀吉は慌てて蓮夜に頭を下げるが他の生徒に反省している様子は見えず、

「……だからと言ってもこの拷問と言う手段はないだろ。だいたい、こんな拷問器具をどこから持ってきたんだ？」

「そ、そうだよ。どうして、僕が拷問を受けないといけないんだよ」

蓮夜は怒りを通り越して呆れているようであり、大きくため息を吐くと明久は拷問を受ける理由はないと叫ぶ。

「それはアキが何かを隠そうとするからでしょ」

「……島田さん、その前に人の秘密を詮索すると言う非常識な行動を恥じなさい」

「は、はい。反省します」

美波は明久に責任転嫁をしようとする様子に蓮夜は大きくため息を吐き、

「だいたい、俺の事を聞きたいなら、本人に聞きにくるのが礼儀だ。それは周りに不信感を与える事にもなります。今は学生でノリでやっているのかも知れませんが社会に出た後に苦勞する事になります。止めなさい。後は坂本代表」

「な、なんですか？」

「君は代表としてクラスをまとめないといけない身ですよ。それが率先するのはどうなんですか？」

蓮夜は雄二を見て雄二に代表としての行動ではないと言うが、

「知らねえよ。俺は明久が地獄に落ちる！？」

「他人の不幸を願うなら、それ相応の不幸が自分にも降りかかると思うように」

雄二と明久の関係は友人と言うには微妙であり、雄二は明久の事などどうなっても良いと言いかけると蓮夜からはチョークが雄二に向かって投げられると同時に雄二の頬に何かがかすった感触と後方の壁に何かが当たったような大きな音がし、生徒達が壁の方を振り返

ると壁に小さく焦げたような跡と一粒の欠片すら残す事なく粉々になっっているチヨークだったものが畳の上に落ちている。

「な、何だ！？ 今のは！？」

「ただのチヨーク投げです。教師とはチヨークを投げるものです」

「た、ただのチヨーク投げじゃねえよ！？ 威力がおかしいだろ」

チヨークがかすった雄二の頬は小さな擦り傷が付き、血がうつすらと滲みだし、自分に何があったかわからないように声を張り上げるが蓮夜は騒ぐ事ではないと言い切り、雄二は本来あり得ないチヨーク投げの威力に立ちあがり声をあげて叫ぶと、

「坂本代表、あまり、うるさいと次は本気で額を狙って投げます」

「……」

蓮夜はこれ以上の威力があると伝えたと雄二は身の危険を感じたように顔を引きつらせて黙り込み、静かに自分の机がわりのミカン箱の後ろに正座をするとクラスメート達も今の蓮夜に逆らってはいけないと思ったように静かに席に座る。

## 第9問

「……レン兄が居れば、僕はFクラスを我がものに」

「明久、おかしな事を考えるなよ。あくまで、今回は周りに問題があつたからであつて、昔から言つてるが、俺はお前の肩を持つだけじゃないからな」

「わ、わかつてるよ。当然じゃないか!？」

明久は蓮夜が居れば自分はFクラスではやりたい放題だと考えたように小さく笑みを浮かべるが蓮夜は明久の考えている事が手に取るようにわかるようにため息を吐くと明久は慌てて否定するが、

「……明久」

「すみませんでした!？　おかしな事を考えました!？」

蓮夜は明久の名前を呼ぶと明久は畳の上で土下座をして蓮夜に謝り、

「まったく、それで、坂本代表、島田さん、明久、清涼祭の出し物は決まったのか？」

「は、はい。あのままではまともらないと思つたんで、最初の3つから多数決を取つて」

「中華喫茶『ヨーロッパアン』か？　……名前は考え直そうな。周りにバカだと思われるから」

蓮夜は清涼祭の出し物はどうなったかと聞くと美波は多数決を取った事を蓮夜に説明し、蓮夜は黒板に書かれた正の字が多い『中華喫茶』を見て名前の変更をするように指示を出す。

「ちょっと、レン兄、バカだと思われるってどう言う事だよ!？」

「明久、お前のせいでクラス全体がバカだと思われたらみんなかわいそうだよ」

「何を言ってるんだよ!! このクラスは姫路さん以外、みんなバカだよ!!」

明久は自分が決めた名前では良くないと蓮夜が言うため、声を張り上げるが蓮夜はため息を吐くと明久はこのクラス自体が瑞希を抜かしてバカだと言い切り、

「……あのなあ。俺が言うのもなんだけどな。明久、お前と同程度のバカはこの世に存在しないんだ。お前が誰かを『バカ』だと言うのは世の中の人すべてに失礼だ。みんなに謝りなさい」

「流石、幼なじみだ。明久のバカを理解してる」

蓮夜は明久の言葉はクラスメート達に失礼だと彼の肩に手を置いて言うつと雄二は楽しそうに笑い、

「僕をもっと信じてよ!？」

「明久、俺はちゃんとお前を信じてる。どうせ、1人暮らしを始めてから、ゲームやマンガに仕送りを使い込んでまともな生活もしてないって、成績だけじゃないんだ。お前のバカさは魂に刻まれたも



のだから」

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが蓮夜は首を横に振って明久に『事実』を伝えようとする姿に、

「……本当に久島先生は明久と会うのは7年ぶりなのかう」

「……………明久の行動パターンを読みきってる」

「す、凄いです。いつか、私も吉井くんの行動がすべて読み切れるようになりたいです」

蓮夜と明久が本当に幼なじみだと生徒達は理解したようで大きく頷き、

「みんなもその反応は酷いよ!？」

「明久、現実から逃げてはいけないぞ。それにお前は清涼祭の実行委員だろ」

明久は泣きながら教室を出て行こうとするが蓮夜は明久の首をつかみ、明久を止めると、

「それじゃあ、喫茶店の名前は後で考えるとして、簡単な役割分担を決めようか？ 島田さんと坂本代表も前に出てきてまとめてくれ」

「はい」

「俺もか？ ……面倒だな」

実行委員の明久と美波だけではなく、代表である雄二にも指示を出す。雄二はあまり清涼祭に興味がないように見える。

## 第10問

「ん？ 坂本代表はあまり、学園祭に興味がないみたいだな」

「ああ。正直、興味が無い。面倒だから、島田と明久に実行委員を押し付けたわけだしな」

蓮夜は雄二の様子に苦笑いを浮かべると雄二は蓮夜の様子から本音を言っても良いところだと思ったのか面倒だと言い切り、

「そうか、まあ、やる気がなくてもやって貰わないと困るんだけどな。思いだしたんだけど、君って昔は神童って言われていた坂本雄二だろ。今はずいぶんとやる気をなくしているみたいだけど、君が中心になってくれれば、西村先生が言っていた設備上昇も簡単だろう？ それともそれくらいもできないで神童って言われてたのかい？」

「ああ。当然だ。やってやろうじゃねえか」

蓮夜は雄二の名前に昔、聞いた噂を思い出して雄二の事を挑発すると雄二は蓮夜の挑発にプライドをくすぶられたのか口元を緩ませると次々とクラス役割分担を決めて行き、先ほどまでの停滞していたのが嘘のように出し物の名前以外は決まってしまう。

「それじゃあ。後10分は自習時間にしましょうか」

「その前に、久島先生に聞きたい事があるんですけど、もちろん、良いよな？」

蓮夜は早く話し合いが終わった事に残りを自習時間にしようと言う

が雄二は挑発された事の仕返しと蓮夜の情報を聞き出したいよう  
でニヤリと笑うと、

「別にかまわない。名前は言う必要はないな。年は24、血液型は  
A。身長体重は必要ないとして3サイズは必要か？」

「……レン兄、3サイズは聞いても嬉しくないから」

「そうか？ 『玲』なら、必須だと詰め寄ってくるぞ」

「玲？ その人って久島先生の彼女さんですか？」

蓮夜は冗談交じりで自分のプロフィールを話し始めると明久は蓮夜  
の言葉にため息を吐くが蓮夜は明久の様子を見て苦笑いを浮かべて  
『玲』と言う名前を出すと瑞希は蓮夜の彼女だと思ったようで遠慮  
がちに聞くなか、男子生徒達は蓮夜に向けて殺意を上げ始めるが、

「や、止めてよ。姫路さん、おかしい事を言わないで！？ 姉さん  
とレン兄がそんな関係になったら、僕はレン兄の幸せを考えて猛反  
対をするよ！！」

「姉さん？ アキ、あんたにお姉さんっていたの？」

明久は自分の姉であり、蓮夜の幼なじみの『吉井玲』を思い出した  
ように全力で蓮夜と玲の関係を彼女なんかではないと否定し、Fク  
ラスの生徒は誰も明久に姉がいると言う事を知らなかったように首  
を傾げる。

「明久、お前、玲の存在を隠してたのか？」

「そ、そりゃ、そうだよ。あんな、姉さんがいるなんて知られたら、僕は恥ずかしすぎて生きていけないよ!!」

「……明久、いくらなんでも言いすぎだろ」

蓮夜は明久が玲の事を隠しておきたい理由も何となくわかるように苦笑いを浮かべるが明久の玲へ対する考えは蓮夜の想像をはるかに超えており、蓮夜は大きくため息を吐くと、

「そうすると、久島先生は明久の幼なじみではなく、明久の姉上の幼なじみとなるのじゃな」

「まあ、そう言う事だ。玲が明久にいたずらをして泣いた明久が良く家に逃げ込んでいたぞ」

「……明久、お前の姉って何なんだ？」

「……言わないでよ。泣きたくなくなってくるから」

生徒達は蓮夜と明久の関係より、明久の姉である玲の方に興味がり始めた時、授業終了の鐘が鳴り響き、

「それじゃあ、今日はここまでだな。帰りのHRは西村先生が出るのか、ちょっと確認してくるから、待機しているように」

蓮夜は1度、教室を出て行く。

## 第11問

「それじゃあ、西村先生、お願いします」

「ああ」

蓮夜は西村教諭にFクラスのHRを任せると職員室に振り分けられた自分の机に荷物を降ろすと、

（……明久を痛めつけるためにあれだけ協力するんだからな。上手く道筋を立てれば良いクラスになると思うんだけどな）

Fクラスを見て感じた事を思い浮かべて苦笑いを浮かべた時、

「久島先生、Fクラスの生徒はどうでしたか？」

蓮夜の様子を見た福原教諭が蓮夜に声をかける。

「福原先生、それがなかなか……昔を思い出しますね」

「久島先生も元気でしたからね」

「いや、元気と言うか……俺は巻き込まれていたと言うのが真実と言うか……ケガで自棄になっていたのも否定できないと言うか」

「それなら、どうして、視線をそらすんですか？ 本当は好きでやってましたよね？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて学生時代を思い出すと言うと福原教諭は学

生時代の蓮夜を思い出したようで昔を懐かしむように笑うと蓮夜は友人達に巻き込まれたただけだと言うが自分にも後ろめたい事があるようで福原教諭から視線を逸らした時、

「ん？ 福原先生は久島先生の事を知っているのですか？」

「はい。久島先生が高校生の時に日本史の授業を受け持っていましたよ。彼も今は落ち着いていますですが昔はかなり元気で。屋上からグラウンドまでワイヤーで降りてみたり、巨大な落とし穴を作って、いじめをしていた生徒を埋めてみたり、学園祭で無許可で花火を打ち上げてみたり、カツラと噂されていた校長の頭が本物が偽物が確認したりと他にもいろいろと」

「……久島先生」

「わ、若かったんです。もう、そんな事はしません！！」

西村教諭は簡単にHRを切り上げてきたようで話していた2人に声をかけると福原教諭は蓮夜が高校時代に行った騒ぎを話しだし、西村教諭は福原教諭から聞かされる蓮夜の高校時代の出来事に眉間にぴくぴくと青筋が浮かびだすと蓮夜は若さゆえの過ちだと全力で弁明を始め、

「……当然です。おかしい行動は控えてください。あのバカどもがマネをしそうですから、教師としての自覚を持ってお願いします」

「いや、流石に人に拷問にかけるような危ない事は……してたけど」

「……久島先生、あなたは何をしていたんですか？」

西村教諭は蓮夜に教師としての自覚を持つように言っていると蓮夜はFクラスの生徒が明久にしていた拷問に何かが引つかかったようで小さな声でつぶやき、その声は西村教諭の耳に届いたようで西村教諭は大きなため息を吐く。

「流石に冗談です。それより、西村先生、福原先生、授業の事なんですけど、俺は西村教諭の補佐と言う形になるらしいので、今のFクラスの状況をできれば個人での成績を教えてください。個人毎の学習計画も立てて見たいので、福原先生にもご指導をお願いしたいんですが」

「わかってますよ。私が協力できる事は何でも言ってください」

「そうか。それなら、私の机に来てくれ」

「はい」

蓮夜は苦笑いを浮かべながら冗談だと笑い、彼なりのFクラスの教育計画を立てたいようで西村教諭と福原教諭にFクラスの成績を教えて欲しいと頭を下げると西村教諭は蓮夜が気に入ったようで、蓮夜に付いてくるように言っていると、

「久島くんも立派な先生ですね」

福原教諭は教え子である蓮夜の成長が嬉しいようで西村教諭に授業のアドバイスを受けている蓮夜の姿を見て優しい笑みを浮かべる。



## 第12問

「……で、2人は何をしたかったわけだ？」

「……」

蓮夜が職員室でしばらく、西村教諭のアドバイスを受けていると明久と雄二がまた騒ぎを起こしたと言う話になり、蓮夜は西村教諭の補佐で2人の捕縛に動いき、雄二は蓮夜から視線を逸らすすでに明久は蓮夜の前で土下座をしている。

「明久、顔をあげる。お前達は目的があつて『女子更衣室』に忍び込んだんだろ。話は聞く、それで納得がいかなかったら、根性を叩き直すだけだ。俺は玲と違っておかしい事はない」

「……怒らない？」

「話を聞いてから考える。後は話をする時はきちんと相手の目を見る」

蓮夜は話をするために明久に顔をあげるように言うと明久は蓮夜から目を逸らすため、蓮夜は明久に状況をしっかりと話すように言うが、

「……久島先生、吉井と坂本を捕まえたのは確かにありがたいんだが、屋上から、ワイヤーで降りての奇襲はどうかと思うんだ」

「……俺もそう思う」

蓮夜が2人を捕まえるに至った過程には問題があったようで同席していた西村教諭と捕まった人間である雄二は眉間にしわを寄せる。

「いや、ちょっと、昔の血が騒ぎまして」

「……明久、お前の兄貴は何をしてたんだ？」

「い、いや、僕はあまりおかしな事をしてたとは聞いた事がなかったんだけど」

蓮夜は苦笑いを浮かべると雄二は明久に蓮夜の過去を聞くが明久も知らない蓮夜の一面だったようで首を横に振ると、

『西村先生、Fクラスの須川と横溝が！！』

「……今度はそっちか、久島先生、ここは任せても良いでしょうか？」

「はい。わかりました」

他にもFクラスの生徒が問題を起こしたようで西村教諭は明久が蓮夜に頭が上がらないのを理解したようで蓮夜に2人を任せて生徒指導室を出て行くが、

「……今更だけど、俺、今日は初日なんだけど、こんな事をして良いのか？」

「本当に今更だな」

蓮夜は西村教諭を見送った後に自分に明久や雄二を処罰できるのか

と首をかしげ、雄二はため息を吐く。

「まあ、状況を確認してからだな。この学園はあまり停学とか直接的な処罰は嫌いみたいだしな」

「そうなの？」

「実際、最初の試召戦争の話も聞かせて貰うと実行犯はDクラスだとしても脅迫をしてるわけだからな。周りが納得がしているとは言っても、何もおとがめなしは本来はあり得ない。お前らはバカをやるのも良いけど、もう少し、西村先生や先生達に感謝をしなさい」

蓮夜は西村教諭からのアドバイスで文月学園の特性を理解しているように苦笑いを浮かべると2人も昔の自分と同じように直ぐには理解できないがいつか西村教諭達の思いも理解出来ると思ったようだが、

「何で、鉄人なんかに」

「明久」

「う。わかったよ。感謝できるような事があつたらね。と言う事で、雄二、帰ろうか？」

「そうだな」

明久はまだ蓮夜の言いたい事が理解できないようであり、とりあえず、話を切ると誤魔化して逃げようとする。

「それじゃあ、とりあえず、どう言う状況で女子更衣室に忍び込む

事になったか説明して貰おうか？ 逃げようとしたのは罰を与えないといけないから、一先ず、正座で良いぞ」

しかし、蓮夜からは逃げきる事はできずに明久と雄二は床に正座をさせられる事になる。

### 第13問

「……なるほど、明久らしいと言えらしいんだが」

「な、何？」

「……常識で男子生徒が女子更衣室で待ち伏せをするな。そして、逃げ込むな」

蓮夜は明久と雄二から瑞希が転校してしまうかも知れなく、それを防ぐために雄二に協力を仰ごうとした途中で雄二の行動を読んで女子更衣室に入った事、雄二は幼なじみの少女『霧島翔子』から逃げていた途中で女子更衣室に隠れた事、2つの理由を聞いてため息を吐く。

「で、でも、そうでもしないと雄二を捕まえないわけだし」

「……久島先生は翔子を何もわかっていないんだ。あいつに常識は通用しない」

蓮夜がため息を吐く様子に明久はバツが悪そうな表情をする隣で、雄二は眉間にしわを寄せて常識から外れないと翔子からは逃げきれないと言いが、

「坂本代表、1つ聞いても良いか？」

「お、おう」

「逃げるから、追いかけられたんじゃないのか？」

蓮夜はもう1度、ため息を吐くと雄二が逃げる事に原因があると言  
い切る。

「待て。普通に考える。逃げるだろ」

「なぜだ？ 幼なじみが一緒に帰ろうと言ってきただけだろ。用事  
もないなら、一緒に帰るだけで良いわけだろ」

「そんな常識で翔子を測るな！！」

蓮夜は一緒に帰ってやるくらいしてやれば良いと雄二の行動に呆れ  
たようだが雄二から見ると一緒に帰る事自体が危険な行為でしかな  
いようで声を張り上げるが、

「坂本代表、良いか。常識外れな幼なじみが自分にしかないと思  
ったら大間違いだ」

「……そうだね」

「おい。明久も久島先生もなんで俺から目を逸らすんだ」

蓮夜と明久は常識で測り知れない幼なじみを持っているのは雄二だ  
けではないと言い、雄二は2人の反応に意味がわからないようで眉  
間にしわを寄せると、

「坂本代表が霧島さんから距離を取ろうとする理由もわかるが、坂  
本代表が割り切っていないのに拒絶するのは間違っていると思っ  
けどな」

「な、何を言ってるんだ!？」

「レン兄、雄二、どうかしたの？」

蓮夜は雄二が翔子への恋愛感情を押し込めようとしている事に気づいたようでくすりと笑うと雄二は見透かされた気分になったように声を張り上げるが明久は意味がわからないように首をかしげる。

「まあ、明久は気にしなくて良い。玲の弟だけあって鈍さも常識外れだから、同年代の恋愛感理解できないし、仮に理解できても理解に達するまでの知能がないから説明するだけ無駄だしな」

「ちょっと待って!？ 明らかに罵倒が混じってるよね!？」

「明久、よくバカにされてるって気づいたな。それに気づけるようになっただけ賢くなったと言うことが」

「レン兄、頭を撫でないで!？」

蓮夜は明久には雄二の翔子への想いを理解できないから気にする必要はない事を伝えるが明久はその言葉に声を上げ、蓮夜は明久の反応に少し驚いたような表情をした後、彼の頭を撫で、

「……明久と久島先生の関係が良くわからないんだが」

雄二は目の前で繰り広げられるコントのような幼なじみのやり取りに頭がついて行かないように眉間にしわを寄せる。

## 第14問

「まあ、とりあえずは2人とも真面目に清涼祭の準備に参加する事、姫路さんの体調を考えると設備向上は必須なんだ。売上を上げる事」

「だけど、設備の向上はまだしも姫路の転校の問題点は3つだろ」

蓮夜は明久と雄二に罰として清涼祭の準備に力を入れる事を言い渡すが雄二は何か考えているようで眉間にしわを寄せると、

「そうなの？」

「なるほど、元神童は伊達じゃないか」

雄二の様子に明久は首をかしげ、雄二が考えている事に蓮夜も気づいているようで苦笑いを浮かべる。

「レン兄、雄二、どう言う事？」

「設備向上は必須、だけど、それ以上に姫路さんの体調を考えると旧校舎の老朽化が酷いって事だ」

「後はクラスメートの成績、姫路の両親はレベルの低いクラスメート達ばかりじゃ成績の向上も考えられないだろ」

明久は残り2つの理由を教えて欲しいと言うと蓮夜と雄二は『設備』、『学習環境』、『クラスメート』だと話し、

「参ったね。問題だらけだ」



「3つ目は姫路と島田が召喚大会で活躍すればどうにかなるだろ。設備は売上しだい」

明久はどうしたら良いのかわからないようで胸の前で手を組み、首を傾げると雄二は2つはどうにかなりそうだが、

「学習環境か……普通に考えると学園がどうにかしないといけないレベルの問題だからな」

「そう言う事だ」

旧校舎の老朽化だけは生徒ではどうしようもできないため、蓮夜と雄二は頭をかく。

「レン兄、雄二、どうにかできないの？」

「とりあえずは学園長に話してみる必要があるな。それじゃあ、行くか？」

「行ってくつて学園長室にか？」

蓮夜は学園長に話を聞いて貰う必要性があるため、2人を学園長に合わせようとするが雄二は簡単に学園長があってくれるとは思っていないためか首を傾げると、

「学生2人じゃ門前払いもあり得るだろ。それに俺は学園長室に顔を出すようにも言われてるからな。まあ、俺は新任の臨職、たいした力になれないかもしれないけどな」

「それでも充分だよ」

「ああ。それより、大丈夫なのか。久島先生」

「何がだ？」

蓮夜は自分ではたいした力添えはできないと思ってくれと苦笑いを浮かべる姿に雄二は何かあるのか蓮夜の名前を呼ぶ。

「俺達は学園に文句を付けようとしてるわけだぞ。臨時職員之久島先生は学園長に目を付けられないか？ 下手したら初日でクビとかないとも言えないだろ？」

「ちょ、ちよつと、レン兄、大丈夫なの！？」

雄二は蓮夜に立場的に大丈夫なのかと聞くと明久は事の重大さに気づいたようで蓮夜に詰めより、

「まあ、大丈夫だろ。いきなりクビは契約を交わしてるし……大丈夫だと思いたい」

「ちよつと、それ、明らかに大事だからね！？ どうするのさ。その年で無職とか！？」

「大丈夫だ。しばらくは食えるくらいの蓄えくらいはあるから」

「なら、どうして目を逸らすのさ！？」

蓮夜は心配ないと笑うが明久は蓮夜の事が心配なようであり、声を張り上げると、

「俺は臨時でも新任でも教師なんだ。なら、やる事は決まってるだろ。生徒の事を考えて動くのが教師、それだけだ。俺の事は良いから、行くぞ。教室でお前らを待ってる仲間もいるんだろ。お前らはその道筋を立てないといけないんだからな。ほら、2人とも行くぞ」

「明久、行くぞ。どうなるかわかんない事なら、ここで悩んで立って仕方ねえ」

蓮夜はそれが教師だと笑い、雄二は蓮夜の言葉にやりにくいと思っているのか頭をかきながら立ち上がると3人で学園長室に向かって歩き出す。

## 第15問

「誰だい？」

「久島です」

「悪いね。少し待ってくれるかい」

3人は学園長室の前に着き、ドアをノックをすると学園長からは少し待つように指示があり、しばらく待っていると、

「……それでは失礼させていただきます」

学園長室では学園長と『竹原教頭』が話をしていたようで竹原教頭がドアを開けて学園長室からでてくる。

「……君が新任の久島先生か？ 私は教頭の竹原です」

「はい。挨拶が遅れて申し訳ありません」

竹原教頭は蓮夜を見るなり、彼の性格なのか蓮夜を『臨時職員』と見下したような目で見るが蓮夜はその視線を気にする事なく頭を下げると、竹原教頭は後ろにいた明久と雄二には何かを言う事なく歩いて行ってしまふ。

「レン兄……何か、竹原先生、感じ悪くない？」

「ああ。俺達を完全に見下したような目をしてやがった」

「まあ、プライドが高そうだしな。あんなもんだろ」

明久と雄二は竹原教頭の態度が気に入らないようだが蓮夜は臨時職員で渡り歩いてきているため、気にした様子もなく、

「久島先生、待たせて悪かったね。入ってきた」

「はい。失礼します。明久、坂本代表も行くぞ」

学園長から入室の許可が出たため、蓮夜は2人に声をかけて学園長室に入ると、

「久島先生、後ろの2人は何だい？」

「すみません。ウチのクラスの坂本代表と吉井明久なんですが、学園長先生に直談判したい事があるとの事でしたので」

「……学生風情が直談判ね」

蓮夜は学園長に頭を下げた後、明久と雄二が学園長に話したい事を伝え、学園長は少し考え込むような素振りをする。

「レン兄、大丈夫なの？」

「明久、ちょっと静かにしている」

明久は学園長の様子に蓮夜の腕を小突くが蓮夜は明久に静かにするように言い、

「まあ、話くらいは聞いてやっても良いけど、初日から2年の問題

児を2人、学園長室まで連れてくるなんて、久島先生、あんたは覚悟ができているんだろうね？」

「覚悟？ する必要がありますか？ 私は福原先生と高橋先生から学園長先生は教師も能力主義だと聞かされました。この程度でクビにされないとは思っていますが」

「……なるほど、食えない男さね」

学園長は蓮夜を脅すような視線を向けるが蓮夜はにっこりと笑い、学園長はそんな事はしないと言う様子に学園長は口元を緩ませ、

「じゃりども、少し待ってな。先に久島先生との少し話があるからね」

「……わかりました」

学園長は蓮夜との話を先に終わらせるため、明久と雄二に待っているように言い、2人は頷くと学園室中央にある来客用のソファに学園長に許可を得る事なく座り、

「……くそじゃりども、あんたらに常識はないのかい？」

「……2人とも、せめて許可を得てから、座ってくれ」

蓮夜と学園長は2人の行動に大きく肩を落とすが、

「え？ だって、立って待ってるのは疲れるよ」

「これくらいは良いだろ。別に減るものでもないんだし」

明久も雄二も自分達の行動が常識だと思っているのか気にする様子はなく、

「……久島先生、悪いね。先にこのくそじゃりどもの話を終わらせるよ」

「……すみません。学園長先生」

学園長は2人の態度に先に終わらせてしまおうと思ったようである。

## 第16問

「却下だね」

雄二が学園長に旧校舎の改修工事を頼むと学園長は少し考えるような素振りをした後に2人の直談判を跳ね返す。

「雄二、このばばあをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久、もう少し態度には気を使え。まったく、このバカが失礼しました。どうか、理由をお聞かせ願えますか？　ばばあ」

「まったくですね。ばばあ！？　レ、レン兄！？　何をするんだよ」

明久と雄二は納得がいかないようで学園長に理由を話すように詰め寄るがその態度は目上の人間に物を尋ねる態度ではなく、蓮夜は2人の頭をメモ帳で叩くと学園長室には小気味の良い音が2度、響き、

「……中身が入ってないから、良い音がするな」

「まったくさね」

蓮夜は頭を押さえる明久と雄二を気にする事なく、2人の頭には中身が詰まっていらないと言い切ると学園長は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべる。

「何すんだよ？」

「坂本代表、明久、納得がいかないのかもしれないけどな。それは



目上の人に物を尋ねる態度ではない」

雄二は蓮夜を睨みつけるが蓮夜はため息混じりの言葉で2人の態度は良くないともう1度、言い聞かせると、

「学園長先生、理由をお聞かせ願いますか？ 2人も納得していないようですし、それにFクラスには1人身体の弱い生徒がいて彼女の体調を考えてしまうと」

「身体が弱い生徒？ …… ああ。姫路瑞希だったかい？」

「そうです。 お願いです。 このままの設備だと姫路さんが転校するかもしれ！？ レン兄、ポンポン、頭を叩かないでよ！？」

蓮夜は2人が設備向上を願い出た理由を補足すると学園長は瑞希に心当たりがあるようであるような素振りをし、その様子に明久はまくしたてるように話したそうとするが蓮夜は明久の頭をもう1度、メモ帳で叩く。

「本当に良い音がするな」

「だろ」

「ちょっと、レン兄、雄二、それはなんなのさ！！」

明久の頭を叩いた時に響いた音に雄二は明久をからかう事に全力を尽くすように切り替えたのか真剣な表情をすると蓮夜は苦笑いを浮かべて答え、明久は2人の反応が不満だと声をあげるが、

「学園長先生も知っての通り、彼女は現在の総合得点は学年で2番

と優秀な生徒ですが身体が弱く、彼女の両親は彼女を心配して転校も視野に入れているそうです」

「やれやれ、久島先生、あんた、本当に食えない男だねえ。生徒の前で良く次から次と学園長であるあたしを『脅して』くるね」

「学園長先生、何を言っているんですか？ その生徒が転校を望んでいないんです。教師として生徒の力になるのは当たり前ですよ」

蓮夜は学園長に瑞希の優秀さを話し始めると学園長は彼女を引き留めるメリットをはじき出したようで蓮夜の言葉に少しだけ表情を緩ませ、蓮夜をからかおうとするが蓮夜はにっこりと笑い、教師として当然の事をしてしていると返し、

「……雄二、レン兄とばあは何を話してるの？」

「……久島先生、侮れねえじゃねえかよ」

明久は蓮夜が押し気味に話をしている様子を理解していないようで首を傾げる隣りで雄二はいつの間にか学園長を巻き込んでいる蓮夜の様子に面白いと思ったのか小さく口元を緩ませる。

## 第17問

「まあ、確かに優秀な生徒が他の学校に流出のは避けたいね。だからと言って簡単に譲くわけにもいかないね。設備に差を付けるのは文月学園の方針であり、これはスポンサー<sup>ウチ</sup>にも了承を得ている事さ。それを覆すんだ。それに見合った結果がないとできないね」

「見合った結果ですか？」

学園長は何か考えがあるようで条件をつけたいようであり、蓮夜は首を傾げると、

「そのくそじやり、2人、話を聞きな。改修の話は前向きに検討してやるよ。その代わりと言ってはなんだけどね。あたしの願いを2人に聞いて貰おうかね」

「わかった。明久を好きにして良いぞ」

「……誰もそんな頭の悪そうな不細工なくそじやりを貰ったって嬉しくないさね」

学園長は交換条件を明久と雄二に話そうとすると雄二はおかしな事を考えたようで明久を売り渡そうとするが学園長は明久を直ぐに却下し、

「こつちだつて、お前みたいならばあ、お断りだ!!」

「……明久、坂本代表、頼むから話を聞くて事を覚えてくれ。話がまったく進まないから」

明久は学園長に向かい叫び、蓮夜は大きくため息を吐く。

「それで、ばばあ。明久の身体が目的じゃないなら、何が目的だ？  
悪いが、俺はばばあみたいなのはお断りだぞ」

「あたしだって、あんたみたいなくそじやりはお断りだよ。それに  
あたしには旦那がいるしね」

「「ばばあ、嘘を吐くな！！」」

雄二は明久がダメなら自分の身体が目的かと言い始め、学園長を拒絶するが学園長は話が進まない事に大きく眉間にしわを寄せて2人が目的ではないと言い切るがその言葉を明久と雄二は信じられないように大声で叫び、

「……本当に失礼なくそじやりどもだね。あんた達は本当に設備を上昇させる気はあるのかい？」

「学園長先生、本当に申し訳ありません」

学園長は呆れているようであり、蓮夜は学生2人の態度に申し訳なさそうに学園長に頭を下げ、

「それで、あんた達は話を聞く気はあるのかい？　ないなら、この話はなかった事にするよ」

「聞く、聞きます」

「もったいぶってないでさっさと！？　ぼんぼん、ぼんぼんと頭を

叩くんじゃねえよ!!」

「だから、目上の人に対する言葉づかいには気をつける」

学園長は明久と雄二に話を聞くつもりはあるのかと確認すると明久は直ぐに返事をするが雄二は態度が大きく、蓮夜にメモ帳で頭を叩かれる。

「まったく、久島先生も初日からこんなくそじゃりどもの相手をするのは大変だね」

「まあ、でも、学生は元気なのが1番ですから、勉強ばかりで下を向いているよりは良いと思いますけど」

学園長は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべると蓮夜は苦笑いを浮かべて返事をし、

「学園長先生、すいませんが条件をお願いします。明久、坂本代表も話を聞く」

「う、うん」

「ああ」

蓮夜はもう1度、学園長に頭を下げると明久と雄二に遊んでないで話を聞くように言い、

「それじゃあ、始めようかね。あんた達は清涼祭で行われる召喚大会を知っているかい？」

学園長は1度、頷くと明久と雄二に清涼祭で行われる召喚大会の事を聞く。

## 第18問

「ああ。ウチのクラスにも参加者はいるからな」

「そうかい。それなら、話が早いね。その優勝者に与えられる賞品の1つに如月ハイランドのプレミアムオープンのペアチケットにちよっとおかしな噂があるんだけど、あんた達にそのチケットを回収して貰いたいのさ」

雄二は瑞希と美波が参加するため、召喚大会の事くらいは知っていると頷くと学園長は明久と雄二に召喚大会で優勝するように提案するが、

「ペアチケットだと？」

「坂本代表、どうかしたのか？」

雄二は学園長の提案に何かあるのか顔が血の気が引いて行き真っ青になりだし、蓮夜は雄二の顔を覗き込む。

「ば……学園長、ペアチケットの回収って言っけど」

「ああ。最初に言っておくよ。優勝者に譲ってもらうとかは却下だよ。あんた達2人で優勝するんだ。もちろん、強奪も却下だよ」

「……ちっ」

明久は気にする事なく学園長にチケットの回収が目的なら召喚大会に優勝する必要はないと言おうとするが学園長は直ぐに否定し、明

久は舌打ちをするが、

「学園長先生、先ほど、おかしな噂があるとも言っていましたか、おかしな噂と言うのは」

「ああ。そうだね。プレオープンチケットには如月グループがウェディング体験と言うものを考えているらしくてね」

「ウェディング体験だと？」

蓮夜は雄二の様子も気になるがそれ以上にペアチケットにある噂を聞くと学園長は『ウェディング体験』と言うイベントがあると話し始めるがその言葉に雄二の顔はさらに血の気が引いて行き、

「体験ですよ。それがおかしな噂につながるとは思えないんですけど」

「普通はね。だけど、ウチは試験校と言う名目で世界中から注目を受けている学校だよ。そして、如月ハイランドは遊園地の他に」

「……結婚式にも力を入れたいってわけですか？　だとしても無理やり過ぎますね」

蓮夜はあまりおかしな噂は無さそうだと首を傾げるが学園長は補足をして行き、その途中で蓮夜は如月グループの思惑が理解出来たように大きく肩を落とすと、

「レン兄、何があるの？」

「そのチケットを使って入場すると如月グループが結婚、幸せな家



庭生活をプロデュースしてくれるみたいだ」

明久は話が理解できないように蓮夜に聞き、蓮夜は企業が考える手段ではないと言いたげに大きなため息を吐き、

「そんなものを賞品にしないでください」

「悪いね。もう無理なのさ。竹原が決めた事とは言え、如月グルーブは大口スポンサーだから、へそを曲げられても困るしね。結局は生徒達の問題だから目をつぶるうかとも思ったんだけど、この間、ラブレター1つでバカ騒ぎをした奴らもいるだろ。優勝した人間を襲って無理やり、チケットを奪って如月ハイランドに拉致、ウエディング体験、結婚じゃ、生徒がかわいそうだしね」

蓮夜はそんな噂のある怪しいものなら賞品から外す事も視野に入れて欲しいと言うが学園長は首を横に振り、

「それにあんた達Fクラスが召喚大会で優勝できればスポンサー達にも設備の改修工事は話も進めやすいしね」

「だけど、正直、僕と雄二じゃ」

「やってやる。ばばあ、その代わり、今のままじゃ、優勝なんて無理だ。俺にいくつか条件を出させる」

学園長は明久と雄二が優勝すれば旧校舎の改修工事はスポンサーからの承諾も考えやすいと話すが明久は優勝できるはずはないと思い苦笑いを浮かべた時、雄二は鬼気迫る表情で学園長の提案を受けると叫ぶ。

## 第19問

「条件？ 何だい？ 点数操作だとかは却下だからね」

「……ちっ」

「坂本代表、舌打ちは止めなさい」

学園長は雄二の様子に点数操作は問題外だとため息を吐き、雄二は少しは期待していたのか舌打ちをする姿に蓮夜は大きく肩を落とし、

「冗談だ。まあ、多少は期待したけどな」

「それで条件つてのは何だい？ 無茶なものは聞けないよ」

雄二はまた蓮夜に頭を叩かれると思ったのか、1歩引いて苦笑いを浮かべると学園長は改めて雄二に向き合う。

「条件は2つ。出場者のトーナメント表をいじらせる。後は対戦科目を俺に決めさせる事」

「……それくらいなら聞いてやっても良いね。わかったよ。それじゃあ、話はこれで終わりだよ。あたしは忙しいんだ。さっさと消えな。くそじゃりども」

雄二が出した条件を聞いた学園長は条件を飲むと直ぐに明久と雄二を追い出そうとし、

「……学園長先生、教師は生徒の手本にならなければいけないんで

すから、もう少し言葉づかいを気を付けて頂きたいのですが」

「悪いね。あたしは学園長って言っても教師じゃなくて研究者さね。そう言うのは西村先生達に任せるさ」

蓮夜は学園長の言葉づかいは生徒の教育に良くないため息を吐くと学園長は蓮夜の助言など聞く気はないようで苦笑いを浮かべ、

「ばばあにそんな事は期待しねえよ」

「まったくだね」

「明久、坂本代表！！」

「逃げるぞ。明久」

「了解」

明久と雄二は学園長にはそんなものは期待しないと言い、蓮夜は2人の態度に声を上げると2人は蓮夜から逃げるように学園長室を出て行き、

「まったく、あの2人は……学園長先生、申し訳ありませんでした」

「まあ、良いさね。それで久島先生、一応は就業規則とかを説明しないといけないんだけどね。面倒だから、勝手に読んでくれるかい。あたしは清涼祭も近いから忙しいんだよ」

「はい。わかりました」

蓮夜は2人の態度の悪さに頭を下げると学園長は気にしている様子もなく、蓮夜に就業規則をまとめた冊子を渡し、蓮夜はそれを受け取る。

「それを読んで聞きたい事があつたら、他の先生にでも聞きな。何かあるかい？」

「何かですか？ それなら、竹原教頭は何を企んでいるんですか？  
そして、学園長先生は明久と坂本代表に『白金の腕輪』を獲らせてどうするつもりですか？」

「……」

学園長は蓮夜も追い出したいようで簡単に終わらせようとするが蓮夜はにっこりと笑うと学園長と竹原教頭の様子に何かを感じ取っているようであり、学園長に向かって学園長の目的は明久と雄二にもう1つ優勝賞品である白金の腕輪を獲らせる事だと聞くと蓮夜の言葉は学園長の目的の核心を突いていたようで学園長は大きく肩を落とす、

「……いつから気づいてたんだい？」

「いえ、気づいていると言うまでには至っていませんでしたのでカマをかけさせていただいただけです」

「……本当に食えない男だね」

蓮夜にいつから気づいて居たのかと確認するが蓮夜は学園長の様子から推測しただけで本当は何も気づいていないと言い切り、学園長は眉間にしわを寄せる。

## 第20問

「……白金の腕輪の暴走ですか。それを竹原教頭は利用して文月学園を乗っ取りたいと」

「そう言う事さね」

蓮夜は学園長から召喚大会の優勝賞品である『白金の腕輪』には重大な欠陥がある事と竹原教頭はそれを世間に暴いて文月学園を乗っ取る事を考えているは聞き、眉間にしわを寄せると、

「……学園長の様子から今更、白金の腕輪を賞品から取り下げる事はできないんですね？」

「ああ。すでにスポンサーには新技術として発表してるしね。それを取り下げると文月学園は信賴をなくす。白金の腕輪のお披露目で暴走しても同じ、八方ふさがりさ」

蓮夜は白金の腕輪を賞品から外す事は考えられないかと聞くが学園長は首を横に振る。

「まあ、そうですね。確かに明久と坂本代表なら暴走する心配はなさそうだ」

「……久島先生は反対しないのかい？」

「現状で言えば反対はできませんよ。まだ、暴走するとは限りませんしね」

蓮夜は勝ち目があると思っっているようにくすりと笑うと学園長は蓮夜の反応に驚いたような表情をするが、

「最悪の場合は優勝した人間が成績上位者なら、回収するしかありませんし、その場合は仕方ないでしょ」

「確かにね。最悪の場合はそうしようかい。久島先生、あのくそじやり2人の事は頼むよ。くれぐれもあまり成績を上げすぎないようにね」

「いや、坂本代表はまだしも、明久がCクラス程度に上げるのは1週間やそこらじゃ無理ですよ。あいつは生粋のバカですから」

「……あたしが言うのもなんだけど、もう少し言葉を選べないのかい？」

学園長は蓮夜の様子を見て、少しでも明久と雄二の成績を上げて貰おうと思ったようであり、蓮夜は学園長の言葉の意図を読み切り、学園長は蓮夜の口から出てくる言葉にため息を吐く。

「まあ、口が悪くても態度が大きくても、俺も学園長先生も『教師』ですから、少なくとも竹原教頭は教師じゃないですからね」

「教師ね。あたしはさっきも言ったけど科学者だよ」

蓮夜は竹原教頭が文月学園を牛耳るのはあまり喜ばしく思っていないようであり、学園長は蓮夜の言葉に少しだけ照れくさくなったのか蓮夜から視線を逸らし、

「わかりました。そうしておきます。ただ、高橋先生や福原先生、

西村先生、他にも今日みた限りでもこの先生方は生徒のために努力してます。それを作ったのは学園長先生ですから、だから、俺は臨時でもここの職員として学園長先生を信じます」

「やれやれ、よく、そんな恥ずかしい言葉が出てくるね」

蓮夜は自分は教師ではないと言う学園長の様子にくすりと笑うと学園長は大きく肩を落とすと、

「それじゃあ。あたしもやれる事をしようかね。久島先生、あたしの用件はもう終わりだよ。さっさと出て行ってくれるかい？」

「わかりました。失礼します。学園長先生も無理しないでください」

「わかってるよ。身体を壊さない程度に頑張るよ」

学園長は白金の腕輪の修理で忙しいようで蓮夜を追い払おうとし、蓮夜は学園長の考えが理解出来るようで頭を下げると学園長室を出て行く。

## 第21問

（さてと、一先ずは就職ができたわけだし、1人でも祝杯をあげますか？）

蓮夜は勤務時間を終えると面接を受けに行ったその日に就職が決まるとは思っていなかったため、苦笑いを浮かべながら食品とビールを買い込んでいると、

「ん？ 久島先生、夕飯の買い出しっすか？」

「……久島先生？」

雄二が長い黒髪の綺麗な少女と歩いており、蓮夜を見つけて声をかける。

「坂本代表、そうだよ。就職も決まったわけだし、祝杯をね」

「1人だよ。ずいぶん寂しいな」

「まあ、いきなりだったし、週末ならまだしもな……この年になると独り者の友人も少なくなってるな」

雄二は蓮夜の買い物かごのビールを見て、蓮夜をからかうように言うが蓮夜は少しだけ恥ずかしそうに頭をかくと、

「それより、彼女か？ 坂本代表も隅におけないな」

「ち、ちげえよ！？ か、勘違いするなよ。こ、こいつは……」



「……雄二の妻の『霧島翔子』です」

「妻？ まだ、結婚はできない年だから、婚約者か？ 霧島さん、俺は今日からFクラスの担当教師に赴任した久島蓮夜です。よろしく」

蓮夜は話を変えようしたようで雄二の隣に少女の事を聞くと少女は『霧島翔子』と名乗り、蓮夜は翔子に頭を下げるが、

「ちょ、ちよつと待ってくれ！？ こ、こいつは婚約者でも何でもない。ただの『幼なじみ』だ！！」

「幼なじみから結婚か？ じつくりと愛をはぐくんできてるんだね。俺は応援するよ」

「……久島先生、ありがとう」

雄二は翔子を幼なじみだと叫ぶが蓮夜は雄二の中にある感情こころのおもひも感じ取ったようで2人の様子につこりとほほ笑み、2人を祝福し、翔子は頬を染めて蓮夜に頭を下げる。

「しかし、羨ましいな。こんなにお互いを想いあえる幼なじみがいると言うのは」

「……いや、だから、久島先生、俺の話を聞いて……なあ、久島先生、先生は明久と幼なじみなんだよな？」

「正確に言えば、明久の姉の玲とだな」

蓮夜は翔子の様子に苦笑いを浮かべると雄二は翔子との関係を否定しようとするが、その途中で蓮夜にも幼なじみの女性がいた事を思い出す。

「実は何かあったとかないのか？」

「玲とか……まあ、その話は置いておこう」

「何だよ。この状況で……」

雄二は反撃だと言いたげに蓮夜と玲の話を聞こうとすると蓮夜は雄二の肩に手を置き、

「……坂本代表、覚えておくんだ。間違っても酒に飲まれるな」

「お、おう。って、何があったんだ！？ 久島先生！？ お、俺は聞いちゃいけない事を聞いたのか！？ って、言うか、そんな事を生徒の前で言うな！？ こ、この事を明久は知ってるのか！？」

「……生徒以前に俺は君達の人生の先輩だ。同じ事になりそうな人間にはしっかりとアドバイスはしないとイケない。明久には……まあ、知らない方が幸せな事もあるだろ」

「俺だって、そんなリアルな話は聞きたくないわ！？」

蓮夜は意味ありげな言葉を雄二に送ると雄二は蓮夜の身に過去に何があったかを理解したようで慌て、蓮夜はこの先に雄二にはそのような事が必ず起きると死の宣告をする。

「……久島先生、吉井のお姉さんにアドバイスを貰いたいから、連

絡先を教えて欲しい」

「しょ、翔子！？ お前は何を言い出すんだ！？」

「……吉井のお姉さんとは話が合いそう。きっと、雄二との事での確なアドバイスが貰える」

「く、久島先生、おかしな事を聞いて悪かった。俺と翔子は帰る」

「おう。気を付けて帰るんだぞ」

翔子は蓮夜と雄二の様子に玲に興味を持ったようであり、雄二は身の危険を感じたようで翔子を引っ張って蓮夜から逃げるように去って行く。

## 第22問

「どうした？」

「レンくん、面接はどうでしたか？」

蓮夜が夕飯の準備をしていると携帯電話が鳴り、蓮夜はディスプレイに映る『吉井玲』の名前に電話を取ると電話の先からは蓮夜の幼なじみであり、明久の姉である玲が直ぐに蓮夜に声をかけると面接の手ごたえを聞き、

「……なぜか、即日採用で仕事をしてきた」

「採用されたんですか？ 良かったですね」

「まあ、そうだな」

蓮夜は夕飯の準備より、玲との会話を優先しようとガスコンロの火を止めると居間のソファーに座る。

「それでは久島先生に質問です。新しい勤務先はどうでしたか？」

「ん？ そうだな。昔を思い出した」

「それは毎回、学校を変える度に言っていないですか？ だいたい、私の質問の答えにはなっていないません」

「まあ、そうなんだけどな」

玲に返事をする。玲は蓮夜の返事に不満げな声をあげ、蓮夜は電話の先の玲の様子を思い浮かべると、

「そうだ。担当したクラスに明久がいたぞ」

「アキくんがですか？　どうですか？　いつも通り、不細工で甲斐性はなかったですか？」

「……その言い方は止めるよ」

明久の事を話すが玲の明久の評価は低いようであり、蓮夜は玲の反応に苦笑いを浮かべる。

「それで時差があるからいつもはメールなのに電話をかけてくるなんて何かあったか？」

「レンくんの声が聞きたくなっただけです」

「ああ。そうか」

「照れてますか？」

「まあ、否定はしないよ」

蓮夜は玲から電話に彼女に何かあったのかと聞くと玲はただ蓮夜の声が聞きたくなっただけだと言い、蓮夜は彼女の言葉に照れたように首筋をかく。

「そうですか。満足です」

「そりゃ、良かった」

電話の先から聞こえる嬉しそうな玲の声で蓮夜は敵わないと思っているようであり、

「忘れてました。レンくんに報告しておかないといけない事がありました」

「報告？ 何だ？」

玲は蓮夜に話しておきたい事があると言い、蓮夜は首を傾げると、

「3カ月だそうです。レンくんがこっちまで私に会いにきてくれた日の子です」

「ちょっと待て!？」

「冗談です。あの時は穴を開け忘れました」

玲は電話の先で子供ができたと言いたいのか意味深に笑うと蓮夜は声をあげるが蓮夜の慌てように玲の声は少しだけ残念そうである。

「あ、あのな。今の状況でおかしな事を言うな。俺は教師だって言っても臨時教師であって収入だって安定してないんだぞ。文月にだっていつまでいられるかわからないんだからな。それに挨拶の前に子供ができたなら、俺はおじさんとおばさんになんて言えば良いんだ？」

「大丈夫です。お父さんとお母さん、お義父さん、お義母さんにはすでに了承済みです。知らないのはアキくんだけです」

「……悪い。どこまでがホントでどこからが冗談かまったくわからない。それにどうして明久には秘密なんだ？」

蓮夜は玲の様子にため息を吐くが電話の先の玲はすでに根回しは終わっていると言い、蓮夜は眉間にしわを寄せるが、

「決まっています。大好きなお姉ちゃんが大好きなレンくんに手込めにされてると知った時のアキくんの顔を見るのが楽しみだからです」

「……いや、明久は俺と玲の関係を知ったら本気で俺は考え直すよに言われる気がするんだ」

「アキくんに反対されたら考え直してしまいますか？」

「そんなわけがないだろ」

「はい。レンくんなら、そう言ってくれると信じてました」

玲は蓮夜を試すような事を言うが蓮夜の答えは決まっており、玲は蓮夜の答えに嬉しそうに返事をする。

「……試すような事は言わないでくれ」

「せっかく、同じ大学まで一緒に留学したのに先生になりたいと言つて、こっちで決まりかけてた就職も蹴って日本に帰ってしまったレンくんが悪いんです」

「それに関しては反省してるって、悪かったよ。さびしい思いをさせてる」

玲は蓮夜と離れているのがさびしいようで口を尖らせると蓮夜は苦笑いを浮かべて玲に謝ると、

「そうです。私がどれだけ寂しいかレンくんはわかっています」

「いや、まあ、何だ……悪い」

蓮夜は玲のご機嫌を取りたいようだが言葉が見つからないようであり、

「レンくん、謝られると少し悲しくなります」

「ああ。そうだな」

玲の言葉に蓮夜は気分を切り替えようと思ったようで1度、深呼吸をすると離れている距離を埋めるようにお互いの今の状況を話して行く。



## 第23問

(……変な話を振らなければ良かった。いや、待て。昨日の話を考えると相手の事は言っていなかったんだ。久島先生がその酒に飲まれた時の相手が明久の姉貴とは限らないだろ)

雄二は昨日、商店街で聞いてしまった蓮夜の話におかしな事が頭をよぎっているようで眉間にしわを寄せていると、

「おはよう……あれ？ 雄二、どうかしたの？」

「あ、明久！？ べ、別に何もねえよ！！」

登校してきた明久は何かを真剣に考えている雄二を見て違和感を覚えたようで声をかけるが雄二は蓮夜の相手が玲だと思い込んでいるため、声を裏返す。

「そうなの？ また、何かして霧島さんに素敵な腕輪をつけられたんじゃないの？」

「……あんな事、2度とあってたまるか」

明久は雄二の様子に翔子と何かと決め付けたようで机代わりのミカ箱の上にカバンを置くと雄二は翔子に拘束具を付けられ映画館に拉致された時の事を思い出したようで顔を引きつらせると、

「な、なあ。明久、幼なじみが良くくつつくって話は聞くけどよ」

「何？ 自分と霧島さんの事を言ってるの？ そうだね。雄二みた

いな不細工が霧島さんみたいな美人の隣にいるのは許せないよ」

「あ？ てめえ、何だと、バカ久」

「あ？ やるのか？ バカ雄二」

雄二は明久が蓮夜と玲の関係の事を知っているのか気になるようだが、明久の言葉が頭にきたようで睨みあいを始めようとするが、

「待つんじゃないか、2人とも、雄二、お主は明久に聞きたい事があつたのではないのか？」

「そうです。落ち着いてください」

2人のやり取りを見ていた秀吉と瑞希が2人を止める。

「そうだな」

「……命拾いしたな。雄二」

「あ？ それはお前だろ」

2人は秀吉と瑞希の言葉に一瞬、ケンカを中断しようとするが簡単に収まるわけはなく、取っ組み合いになりそうになった時、

「明久、坂本代表、朝からケンカはしない。席に座れ。HRを始めろぞ」

HRの時間になったようで蓮夜が教室に入ってきて2人を止めるが、

「レン兄、止めないでくれ。僕はこの不細工をグロテスクに殺さない気がすまな!？」

「……明久」

「……雄二、命拾いしたな。レン兄に免じて今日のところは引いてやる」

明久は止まる事はなく、雄二につかみかかろうとすると蓮夜の声は少し低くなり、蓮夜の様子に明久は身の危険を感じ取ったようで捨て台詞を吐いて自分の席に座ると雄二も蓮夜の顔を立てようと思っただけ明久に続くように席に座り、

「久島先生、HRは久島先生が担当するんですか？」

「違うよ。基本的には西村先生が行うんだけど、今日は3年生のFクラスの生徒が騒ぎを起こしまして生徒指導室に詰めているので変わりだ」

瑞希は昨日の帰りのHRが西村教諭だったのに蓮夜がきた事に首を傾げると蓮夜は苦笑いを浮かべて今朝の状況を話し、

「それではHRを始めましょう……島田さん、どうかしたかい？」

「あの。久島先生、昨日だけで女子生徒5人から告白されたってホントですか？」

蓮夜はHRを開始しようとすると思波は蓮夜に暴動になりそうな事だが気になるようで蓮夜が女子生徒から告白されたと言う噂の事実を確かめようとする。

「……正確には7人と船越先生からです。当然、断りました」

『『『『殺せ！！！！！！』』』』』

蓮夜は女子生徒からの告白に困っているようで大きく肩を落とすがそんな蓮夜の様子がもてないFクラス男子の怒りに火を点け、教室から叫び声が上がリ始め、

「レン兄、逃げて！！！」

「ちょ、お前ら、落ち着け！！ 島田、こんなところでそんな騒ぎになりそんな事を聞くな！！」

「そ、そうね。うかつだったわ。久島先生、逃げて！？」

明久、雄二、美波の3人はクラスメートの暴走に顔を引きつらせながら蓮夜に逃げるように叫ぶが、

「落ち着きなさい。HRを始めますよ」

蓮夜は身の危険など感じてないようでFクラスの生徒の様子に大きくため息を吐いており、逃げる様子はない。

## 第24問

「あ、明久、不味いのじゃ、このままでは久島先生が」

「わ、わかつてるよ。レ、レン兄、お願いだから逃げて！！ このままじゃ、レン兄が！？」

明久と秀吉はFクラスの生徒が嫉妬で人を殺せると思っていないであろう蓮夜に全力で逃げると叫んだ時、

「へ？」

「まったく、HRを始めると言っているのが聞こえないのか？」

蓮夜はチヨークを1本持つと先頭を切って席から立ち上がり、蓮夜に殺意を向けていた『須川亮』に向けてチヨークを投げると蓮夜の手から放れたチヨークは亮の額の中心を見事に撃ち抜き、亮の額でチヨークは粉々に砕けるばかりか亮はチヨークの勢いに負けて後方に吹き飛び、畳に後頭部をぶつけて白目を向き、教室はあり得ない状況に一瞬の静寂が訪れ、蓮夜のため息混じりの声だけが響く。

「お、俺は下手したら、昨日、あれを喰らっていたのか？」

「チヨーク投げの威力じゃないのじゃ」

「他にも喰らいたい奴はいるか？ いるなら、1発ずつお見舞いするぞ」

雄二は目の前で起きた白目を向いている亮に顔を引きつらせるが蓮

夜は気にする様子はなく、蓮夜は立ち上がっている生徒達を見てくすりと笑うと生徒達は次々と席に座って行き、

「あ、あの。久島先生、どうして、チヨーク投げなんですか？」

「ん？ 昨日も言っただけ教師はチヨークを投げるものだからだ」

「えーと、少し古いと思います」

瑞希は蓮夜がチヨークを投げる理由を聞くと蓮夜は質問の意味がわからないように首を傾げ、瑞希は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべ、

「そうか？ 俺の高校の時は騒ぐと福原先生に良く喰らったんだけどな。まあ、もう、7年も前だから古く感じてても仕方ないか。まだ、福原先生の威力には届かないって言うのに、やっぱり、投げる時に手首のスナップを加えて貫通力をあげて威力を増さないといけないな。これじゃいつまでたってもロツカーに穴を開けられない」

「か、貫通力？ レン兄、ちょ、ちょっと待ってよ！？ チヨーク投げに貫通力はいらないから、貫通したら困るからね！？」

蓮夜は瑞希の言葉に高校生時代に福原教諭から喰らったチヨーク投げを思い出しているようで苦笑いを浮かべるが蓮夜の口から出るチヨーク投げにはあり得ない破壊力に明久は声をあげ、教室の空気は完全に蓮夜を西村教諭と同等の獣扱いの空気になっているが、

「待て。明久、問題はそこじゃない！！ 久島先生、今、何先生って言いましたか？」

「何先生って、福原先生だよ。最初はお前達の担任だっただろ」

雄二だけは蓮夜の口から出た人物の名前が信じられないようで聞き間違いだと思っていたのか蓮夜に確認するが蓮夜の口から出る名前は文月学園の生徒が知っている福原教諭で間違いなく、

「ちょ、ちよつと待つて。レン兄、僕達の知っている福原先生とレン兄の言っている福原先生って同一人物？」

「明久、何を言ってるんだ？　なんでお前らに知らない先生の話をしていないといけないんだ？」

明久は重ならない福原教諭の姿に慌てて声をかけるが蓮夜は眉間にしわを寄せると、

「良いか。お前らが残りの約2年の学生生活を無事に過ごすとして怒らせてはいけないのは西村先生や保健体育の大島先生じゃない。福原先生だけは怒らせるな。これは俺の経験談だ。わかったら返事」

『『『『……』』』』

蓮夜は真剣な表情で福原教諭だけは怒らせると言う蓮夜の様子に先ほどまで蓮夜に殺意を向けていた生徒達は息を飲んで大きく頷く。

## 第25問

「それじゃあ、今日からは本格的な清涼祭の準備期間になるからな。ただでさえ、このクラスは準備が遅れてるんだ。間違っても野球とかをするなよ」

HRを終えると生徒達は本格的に清涼祭の準備に動き始めるが、

(……基本的にこう言う事に向いていないんだな)

Fクラスの生徒達は計画性が皆無のようであり、自分勝手に動くだけで作業は一行に進むようには見えず、

「落ち着け。坂本代表、一先ずは掃除から始めよう。明久、お前、掃除は得意だよな?」

「う、うん。家事は昔からしてるから、得意だけどそれがどうかしたの?」

「掃除の指揮はお前が執れ。この設備じゃ、掃除に手を抜くなよ。坂本代表は島田さんと総指揮。後は調理の方は土屋と須川はしばらくは隅に寝かせておけ」

蓮夜はバラバラに生徒達が動いているのは効率的にも問題があるため、リーダーを決めるが先ほど蓮夜にチョコクを喰らった亮はまだ目を覚ましておらず、蓮夜の言葉に生徒達は亮が作業の邪魔になると判断したようで廊下に放り投げる。

「それじゃあ、始めるぞ。何かあれば言ってくれ。なるべく、対応



するから」

「レン兄、それなら、洗剤が欲しい。流石に洗剤なしじゃ、この教室はキレイにならない」

「ああ。それなら、ちよつと、職員室に行つて借りてくる……おい。お前達はどうして俺から視線を逸らす？」

蓮夜は何か協力できる事はないかと聞くと明久は洗剤は必須だと手を上げ、蓮夜は洗剤を学園の備品だと思つているため、職員室に向かおうとするが文月学園は甘くなく、

「えーと、久島先生、言い辛いんですけど、Fクラスには貸して貰えないと思うわ」

「Fクラスは基本的に必要なものは自分達で用意する事が前提じゃからのう」

秀吉と美波はFクラスには洗剤などは貸出されないかも知れないと答え、

「そう言う事か？　そう言えば、昨日、学園長先生に貰った就業規則にもそんなような事が書いてあつたな。それなら、購買か」

「久島先生、購買ってどう言う事ですか？」

「ん？　必要なんだろ。明久、洗剤に何か注文はあるか？」

蓮夜は状況を理解したようで苦笑いを浮かべると購買に行くようであり、明久に何か指定はあるかと聞く。

「ないけど、レン兄、良いの？」

「ないと進まないんだろ。それくらいは出す。その代わり、遊ばずに真面目にやるんだぞ」

「う、うん」

明久は蓮夜が自腹で洗剤を買ってきてくれる事に驚いているようだが蓮夜は気にする事はなく、

「それじゃあ、行ってくるから、坂本代表、島田さん、仕切りはよろしく」

「お、おう」

「はい。わかりました」

蓮夜は雄二と美波にクラスの事を頼むと購買に言ってしまい、

「……ウチ、久島先生がモテる理由がわかった気がするわ」

「そうですね。頼れるお兄さんみたいで、ちょっと憧れちゃいますね」

美波は蓮夜が初日にも関わらず女子生徒から告白された理由がわかったようであり、瑞希は美波の言葉に頷くが、

（……気にするな。久島先生と明久の姉貴が仮にそう言う関係でも俺には関係ないはずだ。久島先生がモテても関係ない）

雄二はどうしても蓮夜と玲の関係が頭をよぎって行くようで大きく首を振ってその考えを振り払うと、

「始めるぞ」

雄二はクラスの指揮を執って清涼祭の準備を始めて行く。

## 第26問

「久島先生、こんなところで何をしているんだ？ あのバカどもはまた逃げ出したのか？」

「西村先生、違いますよ。ちょっと、買い物です」

「洗剤？」

蓮夜が購買で洗剤や掃除に使えそうな道具を買い込んでいると西村教諭が蓮夜に気づき、声をかけるが蓮夜の手の中にある洗剤に首を傾げる。

「西村先生も知つての通り、Fクラスは飲食店なわけですし、今の状態じゃ、お客さんは呼べませんから」

「確かにそうだが……久島先生、自腹ですか？」

「まあ、これくらいは出さないと……生徒達に点数取りと思われますかね？」

蓮夜は冗談を交えながら清涼祭の出し物のために必要だと笑うと、

「まったく、久島先生、後あのバカどもに差し入れでも買ってやつてくれ」

「西村先生がご自分で差し入れをすれば良いじゃないですか？」

「あいつらは俺からの差し入れだと、何か裏があるとか言いかねな

いだろ。それに新任の久島先生が出しているのに俺が出さないとかつこが付かないだろう」

「ありがとうございます」

西村教諭は財布からお金を取り出して蓮夜に後でFクラスに差し入れをしてやって欲しいと言うが蓮夜は西村教諭が自分を間に入れる必要性を感じないようで首を傾げるが西村教諭は彼なりの照れ隠しなのか苦笑いを浮かべ、蓮夜は西村先生に頭を下げると差し入れの飲み物と洗剤の会計を済ませて直ぐにお釣りを西村教諭に返す。

「しかし、教師になってみて思いましたが、自分の時もですが先生って苦労してますね」

「福原先生にあの後ももう少し話を聞いたんだが、久島先生はずいぶん福原先生や他の先生にも迷惑をかけていたみたいだな」

「……そんな事はないですよ」

蓮夜は差し入れを一先ずは購買の冷蔵庫に保管して貰うと洗剤を手にながら、西村教諭と雑談をしながら教室に戻ろうとすると西村教諭は福原教諭から蓮夜の学生時代の話を聞いたようで眉間にしわを寄せると蓮夜は西村教諭から視線を逸らし、

「なら、どうして、視線を逸らすんだ？」

「……いや、どちらかと言えば、自分も行動も生成もFクラスだったためか生活指導の担当の先生は苦手です」

「成績も？ 高橋先生から聞いたんだが、大学時代は優秀だったと

聞いているんだが？」

西村教諭は蓮夜の口から出た蓮夜の昔の成績に首を傾げると、

「高校時代は部活をやってる間は底辺でしたよ。部活を辞めてから  
もしばらくは目的もなかったですし、勉強も嫌いでしたしね」

「なら、どうやって成績を上げたんですか？」

蓮夜は昔の事を思い出して苦笑いを浮かべると西村教諭は蓮夜にど  
うやって成績を上げたのかと聞き、

「福原先生や他の先生がケガで部活を辞めて腐ってた時にいろいろ  
と気にかけてくれました、それでいろいろと考えさせられました。  
それで自分も福原先生達のようになれたら良いなって、そんな話を  
幼なじみにしたら、1から勉強を叩きこまれました」

「そうですか。久島先生にも……久島先生の幼なじみと言う事は吉  
井のお姉さんですか？」

「ええ。まあ」

「……そうですか」

蓮夜は玲から勉強を教わったと言うと西村教諭は蓮夜が明久と幼な  
じみだと言う事を思い出して首を傾げるが蓮夜は西村教諭は明久に  
優秀な姉がいる事が信じられないように眉間にしわを寄せる。

## 第27問

「しかし、それだけ優秀な姉がいるのにどうして吉井はあんなに成績が悪いんだ？」

「まあ、それは明久の問題ですから、明久も玲もなんですが集中力は桁外れなんで、本当に勉強をする気になれば直ぐに成績は上がると思うんですが、今はまだその時ではないみたいで、そのうち自分でやろって気になりますよ」

西村教諭は明久の成績が底辺な事に首を傾げると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「久島先生もそうだったようにか？」

「そうですね。そのうちイヤでも向きあわないといけなくなりますからね。就職が難しいからどこか大学でもと……他には一緒の大学に行きたいとか青春の意味で」

「久島先生、青春の意味はまだしも俺はそんな微妙に後ろ向きな大学受験はどうかと思うんだが……」

「そうですね。でもそれくらいでやっと火が点くって感じですよ。俺の時の友人達もそうでしたしね」

蓮夜は近いうちに明久は真面目に勉強するだろうと笑うが西村教諭は蓮夜の言葉は生徒達のためにならないと思ったようであり、眉間にしわを寄せるが蓮夜は自分の時代もそうだったと笑う。

「まあ。そうかも知れないが……」

「西村先生、少し待ってください」

「ん？　どうかしましたか！？　久島先生って、ここは2階です！？」

西村教諭は蓮夜と明久の距離が近すぎる事が気になるようで教師としての距離を考えるように言うが蓮夜は西村教諭の言葉の途中で何かに気づいたようで持っていた洗剤と差し入れのジュースを西村教諭に渡し、廊下の窓からグラウンドに飛び降りようとすると、

『げっ！？　久島先生に鉄人まで！？　に、逃げるぞ』

「こら、逃げるな！！　お前達、準備はどうした？　サボるなと言ったばかりだろ！！」

西村教諭が蓮夜を止める声にグラウンドでサボっていた4名のFクラスの生徒が声を上げ、蓮夜は逃げないように言うが生徒達はその言葉を聞きいれるつもりもなく、当然、逃げだそうとするが、

「……まったく、逃げると次は当てるぞ」

『『『すいませんでした！？　命だけは助けてください！？』』』

『

蓮夜はボールペンを素早くポケットから抜き取り生徒達に向かい投げつけるとボールペンは深々とグラウンドに突き刺さり、生徒達はグラウンドに深々と刺さったボールペんに顔を引きつらせながらもこんな人間離れをしている蓮夜に視線を向けるとは蓮夜は次は小銭



を投げつけるつもりようであり、数枚の硬貨を手にとって笑っている。その様子に生徒達は先ほどの須川の事もあるためか血の気が引いて行き直ぐに土下座をしてグラウンドに額を押し当てて命乞いを始め、

「ですから、久島先生、窓からグラウンドに出ないでください」

「あ。そうですね。上履きのままグラウンドに出るのは不味かったですよね。すいませんでした。以後、気を付けます」

「……いや、俺が言いたいのはその事ではないんだが」

蓮夜は2階の窓からグラウンドに飛び降り、西村教諭は蓮夜の行動に声をあげるが蓮夜は苦笑いを浮かべて西村教諭に頭を下げるが西村教諭は眉間にしわを寄せ、

「西村先生、俺はあの4人を連れて教室に戻りますから、教室の方をお願いします」

「ああ。お前達もあまり久島先生を困らせるんじゃないぞ」

蓮夜は西村教諭にFクラスの事を任せ、西村教諭は大きく肩を落とした後に教室に向かって歩き出し、

「さてと、仲間が一生懸命になっている時に自分だけ楽をしようと言う。そのふざけた根性を叩き潰してやろうか？ 一先ずはグラウンド50周で良いぞ」

蓮夜は体育会系の血が騒ぎだしたようであり、生徒達に罰を与える  
と蓮夜の様子に逃げた方が危険だと判断した生徒達は顔を引きつら

せたままグラウンドを走り始める。

## 第28問

「レン兄、お帰り？」

「久島先生、その4人はどうしたんだ？」

蓮夜がサボった生徒4人を引きずって教室に戻ると明久と雄二は西村教諭から話を聞いているのか顔を引きつらせるが、

「まったく、ただか42周で力尽きるなんて最近の子供は軟弱だな」

「……いや、ウチのグラウンドのトラックは1周300メートルだから、12キロ走らされるとそんなもんだろ」

「トラック？ 坂本代表、何を言ってるんだ？ グラウンドを走る基本は外回りだろ」

蓮夜は生徒の軟弱さにため息を吐くが雄二は蓮夜がおかしいと言いかけるが雄二が思っている以上に蓮夜は体育会系であり、

「……お前ら、サボらないように気を付けるぞ」

雄二の一言にクラスの思いは1つになる。

「それで、他に何か手伝う事はないか？」

「いや、掃除を終えちまうと喫茶店は当日がメインだからな。メニュー決めとかは調理班に任せてあるし、これと言ってはないな」

「そうか。確かに大部、進んでいるみたいだな」

蓮夜は何か手伝う事はないかと聞くが、蓮夜の思っている以上に雄二の指示は的確なようであり、作業は順調に進んでいるようである。

「特に何もなければ……ん？　どうかしたか？」

「あ、あの。久島先生、私、美波ちゃんと清涼祭の召喚大会に出るんですけど、少しお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「勉強か？　かまわないよ」

瑞希は遠慮がちに手をあげると召喚大会の勉強をしたいようであり、蓮夜は瑞希の様子に苦笑いを浮かべると、

「レン兄、今更何だけど、レン兄ってなんの教科を教えるの？」

「あれ？　言ってなかったか？　一応は英語が担当教科だけどFクラスの担当だから、全部、教えてくれと言われてるぞ」

明久は蓮夜の担当教科を聞いていなかった事を思い出し、蓮夜は首を傾げた後、全ての教科を教えるように言われていると答え、

「英語か？　確かにレン兄は姉さんと一緒にアメリカに留学してるし、本場だよな」

「おい。明久、今の話はと言う事だ？」

明久は蓮夜が留学していた事は知っていたようであり、その言葉に

雄二が驚きの声をあげ、

「久島先生って留学していたんですか？」

「ああ」

「へえ。どこの大学ですか？」

「ハーバード」

蓮夜が留学していたと言う話に瑞希と美波は興味が湧いたようであり、蓮夜にどこの大学に留学していたかと聞くと蓮夜の口からは冗談だと思ふような大学の名前が出ている。

「久島先生、いくらなんでもそれは冗談だってわかるぜ」

「まあ、冗談だと思うよな。俺も留学を知らされた時は冗談だと思つたしな」

「あの。留学って、久島先生が決めたんじゃないんですか？」

雄二は冗談にしては笑えないと言うが蓮夜も当時の事を思い出したようで苦笑いを浮かべると瑞希は蓮夜の様子に首をかしげ、

「ああ。どう言う経緯か知らないが、朝、起きたらチケットとパスポートを持たされてな。着のみのまま、空港まで引っぱられて、わけがわからないうちにアメリカに連れて行かれた」

「……どう言う状況？」

「今更だけどわからん」

蓮夜の言葉は常識から外れ過ぎており、話を聞いていたメンバーは眉間にしわを寄せるが、

(……朝、起きたら？ 大学時代に明久の姉貴と久島先生は同棲をしてたのか？ ……いや、だから、余計な事を考えるな)

雄二だけは頭の中でいろいろなものが繋がって言っているようであり、顔を引きつらせる。

## 第29問

「あ、あの。久島先生」

「何だ？」

瑞希は遠慮がちに蓮夜を呼び、

「あの。朝起きたらと言っていましたけど、久島先生は吉井くんのお姉さんと同棲していたんですか？」

（良く聞いた。姫路、これで俺の疑問が解ける……いや、待て。しかし、久島先生と明久の姉貴がそう言う関係だったとしたら）

瑞希は蓮夜と玲の関係が気になったようで少し恥ずかしそうに蓮夜と玲の関係を聞くと雄二は幼なじみが付き合うと言う話は聞かない方が良い気がするようであり、眉間にしわを寄せると、

「ひ、姫路さん、おかしい事を言わないでよ。レン兄と姉さんが付き合うような事は『絶対』にないよ。そんな事があつたら、僕はおじさんとおばさんに申し訳なさ過ぎて土下座しないといけなくなる……」

「明久……お前の土下座になんの価値もないからな」

「ちょっと、レン兄、ここでそれを言うのはおかしいからね!？」

「いや。土下座ってそれなりにプライドや地位のある人がやるから意味があるのであって、お前の土下座には価値はないんだ」

「真剣な表情で言わないでよ!？」

明久は蓮夜と玲の関係を本当に何も知らないようであり、そんな事  
はあり得ないと叫ぶと蓮夜は明久の肩を叩くと真剣な表情で明久を  
からかい、

(……久島先生と明久の様子からじゃ、まったくわかんねえな。明  
久は本気で久島先生と姉貴が付き合うのは嫌がつてる気もするし、  
それとも、ウチのクラスの性質上、ここで話したら行けないと思っ  
てるのか? ……いや、明久にそんな事を気づかう知能はない)

雄二は2人の様子から事実を見極めようとする。

「それで、久島先生は吉井くんのお姉さんと同棲していたんですか  
?」

「姫路さんの質問の回答としては同棲をしていたわけじゃないな。  
俺も玲も大学の学生寮に入ってたんだけど、割と規則が緩いところ  
でな」

「そうなんですか……」

「何か、残念」

瑞希は明久をからかっている蓮夜にもう1度、聞くと蓮夜は苦笑い  
を浮かべて同棲はしていないと言い切り、瑞希と美波は年上の蓮夜  
から聞ける恋愛話に期待していたようで残念そうな表情をするが、

(よし。同棲はしていない。セーフだ)



雄二は雄二は小さくガッツポーズをし、

「なるほどね」

「レン兄、どうかしたの？」

「いや、何もない」

蓮夜は雄二が自分の話を聞いて考えている事が手に取るようにわかるように楽しそうに笑うと明久は蓮夜の様子に首を傾げ、蓮夜は何もないと笑いながらも、

(……坂本代表は霧島さんとの事を俺と重ねているみたいだからな。面白そうだから、もう少し遊ぼう)

自分の中で雄二をからかう材料を手に入れたようで楽しそうに口元を緩ませる。

「それじゃあ、姫路さん、勉強だったね。ん。せっかくだ。明久と坂本代表も召喚大会に出るわけだし、一緒にやるか？」

「え？ いや、僕は……」

蓮夜は自分の話をここで切ると瑞希に勉強を教えるついでに明久と雄二の勉強も見ると言うと言ふと明久は後退を始め出すが、

「……俺もすべてに対応ができないから、坂本代表の質問に答えている間に姫路さんに質問すれば彼女の胸元を覗きたい放題」

「仕方ないな。僕も召喚大会に出るわけだし、少しくらいは勉強をしておくとするよ」

蓮夜は明久の扱い方を心得ており、明久の耳元でささやくと明久は蓮夜の口車に乗せられる。

### 第30問

「島田さんはドイツからの帰国子女だったね」

「は、はい。それで、問題が読めなくて……」

「ああ。それなら」

蓮夜は美波の質問に少し考えるとドイツ語なのか美波にわかるように説明し始め、

「……明久、久島先生はドイツ語も話せるのか？」

「僕も初めて知ったよ」

雄二は蓮夜の万能さに眉間にしわを寄せると明久も蓮夜がドイツ語を話せる事を初めて知ったため、苦笑いを浮かべると、

「久島先生はどうしてドイツ語を話せるんですか？」

「留学時代にね。語学は基本だし、英語がメインだけど色々覚え  
た」

美波は信じられないようで勉強などどうでも良くなったようで蓮夜に質問をし、蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「そうなんですか？ それなら、言葉を覚えるコツをウチに教えてください」

「コツ？ ……気合と根性？」

美波は蓮夜に日本語を覚えるためにコツを教えて欲しいと頼むが蓮夜はどこか体育会系であり、

「あの。久島先生、美波ちゃんが教えて欲しいのはそう言うのじゃないと思うんですけど」

「言葉なんか無くたってジェスチャーと気合でどうにかなる」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜は迷う事無く言い切り、

「……久島先生はどこか、Fクラス臭がするんだが、明久、久島先生って本当に頭が良かったのか？」

「そう言われるとあまり、レン兄が勉強をしてる姿って記憶にない。高校の3年上がるちよつと前から、姉さんに勉強を教わっていた気はするけど」

雄二は蓮夜の話からところどころに漏れ出るバカな発言に眉間にしわを寄せると明久は当時の蓮夜を思い出して首を傾げる。

「明久、坂本代表、そっちは大丈夫なのか？」

「ああ。俺は問題ない」

「へえ、流石は、神童と称された事はあるな。それに比べて明久はバカだな」

「ちよつと、レン兄！？ 僕のノートを何1つ見てないのに直ぐに

罵倒ってどう言う事だよ!？」

蓮夜は集中していない2人に声をかけ、覗きこんだ雄二のノートを見て感心したように頷くと明久のノートを見る事無く明久を罵倒し、

「これなら、来年は霧島さんと同じ、Aクラスになれるんじゃないか？」

「な、何で、翔子の名前が出てくるんだよ!？」

明久が叫んでいるのを無視して雄二をからかいに移り、雄二は蓮夜の言葉に驚きの声をあげると、

「違うのか？ この間の試召戦争があって正式に婚約者になったって聞いたんだけど」

「なつてねえよ!! だいたい、そんなガセネタをどこで聞いたんだよ!! 昨日も言っただろ。俺と翔子は『ただの幼なじみ』であつてそんな事実はねえ!!」

蓮夜は首を傾げながら、明久達が2年生になつて直ぐに行つた文月学園の特殊なカリキュラムである試召戦争の結果を聞いているのかその時に行われた雄二と翔子の約束事の話を話し、雄二はそれをガセネタだと叫ぶが、

「さつき、グラウンドで霧島さんからね。後……坂本代表、それを霧島さんの前で言ったら、教師としてではなく、人間としてぶつ飛ばすぞ。自分の弱さを他人にそれも大切な人になすりつけてはいけない」

「お、おう」

蓮夜は雄二の言葉に反応したのか目つきが鋭くなり、雄二は蓮夜の様子に気落とされたようで頷いてしまう。

### 第31問

「それじゃあ、真面目にやるか……ん？ まだ、何かあるのか？」

「結局、久島先生は留学先で何の勉強をしておったのじゃ？」

蓮夜は雄二が頷いた事にくすりと笑うと勉強に戻ろうとすると5人の様子を見ていた秀吉が蓮夜の留学先での事を聞き、秀吉の質問に教室の生徒達の視線が集中し、

「えーと、一応は保健体育の実技を」

「……………久島先生、詳しい話を聞かせて欲しい」

蓮夜は苦笑いを浮かべて冗談らしき事を話すと『土屋康太』を中心に生徒達が蓮夜の言葉に食いつき、

「言つて置くぞ。お前達の期待しているようなスケベな事じゃないからな。スポーツ力学やりハビリとかの勉強だからな」

蓮夜は生徒達の期待を裏切り、生徒達はその場に膝を付き血涙を流し始め、

「あ、あの。どうして、そんな専門的なものを勉強していたのに先生をしているんですか？」

「そうよ。それを生かせる仕事があるんじゃないですか？」

瑞希と美波は蓮夜の経歴から日本で臨時職員の教師をやっている意

味がわからないと聞くが、

「えーと、明久から聞いているかわからないけど、高校時代は空手をしていただけで、そこで練習中にケガをしたんだ。その時は何も考えずにがむしゃらに練習すれば強くなれるとは思ってたんだけど、まあ、ぶっちゃけ、オーバーワークだな。ウチの部活は顧問しかいなくて、同じように根性だ。気合いだ。ってタイプの先生だった。確かにそう言う部分もあるんだけど、やっぱり、それだけじゃないんだ。スポーツに力を入れてるところは科学的なメニューも取り入れてるんだ」

「レン兄……」

蓮夜は当時の事を思い出しているようで少しだけ寂しそうに笑うと明久も蓮夜が腐っていた時の事を思い出したようで目を伏せる。

「勉強をしたのは自分のため、どこかであの時にこう言う考えができたらって考える自分を冷静に見るため、後は同じ間違いをして欲しくないからかな？ 指導者になるよりは教師の方が目線が近いと思うたし、生徒達と指導者の間に入る人間が居ればケガをする生徒も減ると思つてさ。まあ、それで前の学校はクビになったけど」

「クビですか？」

「ああ。臨時職員なのに監督おれの指導方針に文句を言うなってな」

蓮夜は教師として失敗した人間として他に自分と同じ思いをした人間を増やしたくないために教師になった部分もあると言うが蓮夜の性格では争いは絶えなかったようで臨時職員と言う立場の弱い蓮夜はそのために仕事を転々としていたようであり、



「それって、おかしくない？」

「まあ、おかしいのかも知れないけど、これが現実。指導者にとって生徒は自分の名前を売るための使い捨ての駒。生徒達のためって言うけど、ケガをした人間のフォローはしない。まあ、この学校の先生はきちんと考えてくれてるみたいだから、安心したけど、この学校、そのうちスポーツ面でも名前が出てくると思うぞ」

「そうなの？」

美波は蓮夜を追い出した学校が信じられないようで不機嫌そうな表情をすると蓮夜は彼女の性格を好ましく思っているようでくすりと笑った後、文月学園の部活を取り仕切っている人間は優秀だと言い、明久は蓮夜の言葉に首を傾げると、

「ああ。運動部の顧問の先生は独学だけど勉強もすっかりしてるし、大島先生を筆頭に保健体育の先生達の知識も半端ない。正直、留学してまで勉強したのに自信をなくすな…って、俺の話は良いんだよ。ほら、続きをやるぞ。他にも勉強教えてほしい奴は集まれ」

蓮夜は文月学園の教師陣のレベルの高さに驚いているようで自分はまだまだだと苦笑いを浮かべると勉強に戻ろうと他にも参加者はいないかと聞くと生徒達は蓮夜の言葉から逃げるように作業に戻って行く。

### 第32問

「そう言えば、レン兄って、どこに住んでるの？ おじさんとおばさんと一緒に住んではないよね？」

「ああ。近くに部屋を借りてるぞ」

勉強を始めてしばらくすると明久は飽きてきたようで蓮夜がどこに住んでいるかと聞き、

「1人暮らしですか？」

「……姫路さん、何を聞きたいんだ？」

瑞希は蓮夜の恋愛話を諦めてなかったようで、蓮夜が女性と住んでいるのではないかと聞くと蓮夜は大きくため息を吐く。

「えーと、やっぱり、気になるんです」

「ウチも気になります。久島先生は彼女がいるんですか？」

瑞希は苦笑いを浮かべると美波も気になっていたようで前のめり気味に質問をし、

「黙秘権を行使する」

「どうしてですか！？」

「どうしてよ！？」

蓮夜は2人の様子に苦笑いを浮かべると瑞希と美波は声をあげると、

「ん？ 何か、俺だけ搾取されてるみたいだから、それに今は勉強こつちの時間だと言っているだろ。集中しなさい」

「……なあ、明久、お前は久島先生の学生時代に彼女がいたとか知らないのか？」

蓮夜が瑞希と美波に集中するように言っている近くで雄二は明久を肘で突き、明久に蓮夜に過去に彼女がいなかったかと聞くが、

「学生時代？ ……記憶にない。レン兄は女友達も多かったけど、彼女がいるとかは聞いた事がないかな？」

「そうか……役立たずが」

明久は蓮夜が玲と付き合っていた事に本当に気付いていないようด้วย首を傾げ、明久の様子に雄二は舌打ちをする。

「雄二、役立たずってどういう意味だ！！」

「あ？ そのままだろ」

「やるのか。バカ雄二ー！！」

「あ？ 上等だ。表出る。バカ久！！」

雄二の舌打ちに2人は睨み合いを始め出し、

「明久、坂本代表、殴り合いなら外でやれ。せつかく、掃除をしたのに埃が舞うだろ」

「……久島先生、止めなくて良いのか？」

蓮夜は2人を止める事なく、秀吉は大きくため息を吐くが、

「青春とは時にぶつかりあうものなんだ。その代わり、半端な決着は許さないけどな」

「……雄二、争いは良くないよね」

「そうだな」

蓮夜はお互いに精根尽きるまで殴り合えと言い切り、蓮夜の様子に明久と雄二は下手な事はしない方が良いと思ったように席に戻ると、

「ん？ 行かないのか？」

「あ、当たり前だよ。僕は召喚大会を優勝するために勉強をしないといけないんだから、ねえ、雄二」

「ああ。当然だ。久島先生、日本史をメインで教えてくれ。明久はバカだから、何教科も頭には入らないしな」

蓮夜は笑顔で明久と雄二に聞くと2人は蓮夜から被害を受けないように勉強の話に戻す。

「了解。それじゃあ、戻るぞ」

「久島先生、まだ話は終わってないです」

「そうよ。別に減るものじゃないんですから、教えてくれたって良いじゃないですか!!」

「……雄二とのデートの参考にしたい」

蓮夜は明久と雄二の言葉に頷き、勉強に戻ろうとするが瑞希と美波は納得していないばかりかいつの間に翔子が雄二の隣に陣取っており、

「……増殖しているな」

「しょ、翔子、お前、どこから湧いて出てきた!？」

蓮夜は翔子を加え、戦力を増した女子生徒に大きいため息を吐き、雄二は翔子の登場に驚きの声をあげる。

### 第33問

「とりあえずは霧島さん、教室に戻りなさい」

「……どうして？」

蓮夜は翔子に教室に戻るように言うが翔子は蓮夜の言葉の意味がわからないようで首を傾げると、

「久島先生、翔子ちゃんだけ、仲間はずれにするなんてダメです」

「そうよ。霧島さんにだって聞く権利はあるはずよ」

なぜか瑞希と美波は蓮夜の恋愛話が聞けると決めつけており、

「……その前に、俺が自分の恋愛話を話す義務はないからな。それに霧島さんはAクラスの代表だろ。それなのにクラスをほったらかして他のクラスに来てはダメだ。今は清涼祭の準備時間であり、担任と代表の指示で清涼祭の準備をする時間であって無駄話をする時間ではない」

「……クラスは優子がまとめてくれる。だから、大丈夫」

蓮夜は大きくため息を吐き、翔子に教室に戻るように言うが翔子は代役を立ててきたため、問題ないと言い切る。

「あのな。そう言う問題じゃない。霧島さんの責任感の問題だ。自分勝手な事ばかりしているとクラスがまとまらなくなって後々に困る事になるぞ。代表としてだけではなく、人間として、今、やって

はいけない事をしている事に気づきなさい」

「……でも」

蓮夜は翔子に自分勝手な事はしてはいけないと言つが翔子は納得がいかないようであり、蓮夜に何かを言おうとした時、

『霧島さんに意見するなんて許せねえ』

『あの男はやっぱり、八つ裂きにするべきだ』

こちらの様子をうかがっていたFクラスの生徒達は翔子の全面的な味方をしたいようで蓮夜に対して殺気混じりの視線を向け始めるなか、

「もう1度だけ言っぞ。自分の教室に戻るんだ」

「……イヤです」

蓮夜は生徒達の視線など気にする事なく、少しだけ口調を強めて翔子に再度、Aクラスの教室に戻れと言つが翔子は真っ直ぐに蓮夜を見返し、

「そうか……悪いな。霧島さんをAクラスに戻してくる」

「……放して。雄二、助けて」

蓮夜は翔子の首をつかむと翔子を引きずって教室を出て行こうとすると翔子は雄二に助けを求める。

「翔子、言って置くが久島先生が正しいからな」

「何を言ってるんですか。坂本くん、坂本くんは翔子ちゃんを助けるべきです！！」

「そうよ」

しかし、雄二は翔子を見捨て、その雄二の行動は瑞希と美波に火を点ける事になり、

「ま、待て。どうして、俺が怒られないといけないんだ！？ て、てめえ、明久、何をする！！」

「何を、決まってるだろ。僕は貴様のような不細工がこの世に存在しているのが許せないんだ。お前みたいな不細工がよりにもよって霧島さんの隣にいるなんてゆるせるわけがないだ！！ 今の僕なら嫉妬で貴様を殺せる！！」

雄二は瑞希と美波に落ち着くように言っているなか、明久の右ストリートが雄二の顔面に向けられ、雄二はその攻撃を何とか交わすと明久は雄二に向かって吠えるが、

「殺人は犯罪だ。後はお前は人の事を言えるほどの顔じゃないだろ」

「何を言ってるんだよ。僕は365度、どの角度から見ても美少年じゃないか！！」

「明久、これを渡すから、やっておけ」

蓮夜は明久を止めると明久に小学1年生向けの算数ドリルを渡し、



「算数ドリル？」

「明久、辛いかも知れないが、お前はそこからやらないと無理だ。姫路さん、島田さんも遊んでいるヒマがあるなら自習をしていなさい」

明久は蓮夜に渡されたドリルの意味がわからないように首を傾げるが明久は彼の肩に手を置いて優しい声で言う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8230x/>

---

僕と幼なじみな新任教師？

2011年12月16日22時45分発行